
転生した異世界で金を荒稼ぎ

ビフィズス菌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生した異世界で金を荒稼ぎ

【Nコード】

N5527Z

【作者名】

ビフィズス菌

【あらすじ】

高校生のお小遣いよりも月収が安く、

その上毎日16時間労働という過酷な人生を歩む俺は

ハードブラック会社に遅刻しそうになり、

車にはねられて死んでしまった。

しかし、死んだ俺を待っていたのは天国でもなく、地獄でもなく、

魔物がうようよいる異世界であった。

異世界で金を稼ぐのが目的のダメ人間な俺は

怪しげな魔術師に魔法を強制的に教えられ、

そのまま異世界で生活することになる。
果たして異世界生活を満喫することはできるのだろうか？
・
・
・

第1話 「俺、異世界に転生する」 (前書き)

唐突に思いついたものを書いてみました。

更新頻度はあまり多くないと思いますが

ぼちぼちUPしていきますので宜しくお願いします！

タイトル横の残金表示は邪魔なので消しましたw

第1話 「俺、異世界に転生する」

俺は齊藤^{さいとうひろゆき}広幸。会社員だ。

俺の勤めている会社は給料が極端に安い。

ハンパじゃない。月収が高校生のおこづかいよりも少ない。

その上、上司はがみがみうるさくてストレスが溜まる。

まあここは1億歩譲って我慢してあげよう。

しかし、俺の一番気に入らない点がある。それが・・・

重労働だ。俺の会社は一日16時間もの労働をする。

なのにこの安い給料なんだ。給料を60倍くらいにしてもらいたいものだよ。

そして俺も俺だ。顔は中の下、運動神経0。通知表も今までずっとALL1だった。

恋愛経験もちろん0なわけで、俺はダメ人間の代表と言っても過言ではなかった。

そんなある日、俺はハードブラックな会社に遅刻しかけた。

俺は非常に焦っている。それもそのはずだ。

ハードブラック会社は1秒でも遅刻した瞬間に、その月の給料が0になる。

いくら少ないとはいいい、ただ働きだけはごめんだ。

俺は朝食を食わずに家を飛び出した。

というよりは食べたかったが冷蔵庫にはなにもしいていなかった。

「あと3分！」俺は更に走るスピードを上げた。

しかし、俺は運動音痴だ。足の速さも小6と変わらないくらいの遅さだ。

俺は自分の足の遅さに嘆きながらも走り続けた。

「あと一分!!」やっと会社が見えてきた。

しかし会社にとどり着くまでには大きな壁がある。

横断歩道だ。この信号は一度タイミングを逃すと、1分くらいは青に変わらない。

俺がたどり着いた頃には既に赤に変わっていた。

「ちくしょおおお!!」俺は何も考えずに信号無視をした。

「ぎゃあああ!!」俺は案の定車にはねられた。

いや、俺は車にはねられることを願っていたのかもしれない。だんだんと意識が薄れていく。俺は目をつぶった。

—————8月21日。斉藤広幸、死亡—————

「……本当にこんな人生の終わり方でいいのですか?」どこから声が聞こえる。

俺は目を開くとあたりは真っ暗であった。

すると、闇の中から青いマントを着て杖を手に行っている一人の男が現れた。

「あんたは……?」

「私は魔術師、簡単に言ったら魔法使いと言ったところでしょうか?」男は言う。

「は、はい?」俺は聞き返した。

それもそのはずだ。魔術師?魔法使い?そんなものが世界のどこにいるというんだ。

いるわけない。あれは物語上の話であって実在するはずなんてないのだ。

「おや、信じられないという顔をしていますね。」魔法使いは笑いながら言った。

「おいおい、そんな奴いるはずないんだよ。大人をからかうの面白い加減にしろ」

「それがいるんですよ。少なくともこの世界にはね」

「一体どういことですか？」俺の頭の中で？のマークが渦巻く。

「簡単に話を説明しますね。まずアナタはこの前車にはねられて死にました。

そして、本来ならそこで物語終了というところですが、作者はそこまで甘くないのです。

あなたはもとの世界ではクズ人間、ゴミ人間、生きる価値のない人間・・・

我々はそのような生きる価値の無いクズ人間にチャンスを与えるのです。

もしアナタがもう一度人生をやり直したい、と願うのであればそれを叶えてあげます。

そう、我々の住む世界、異世界で！」

「・・・・。」俺は全く理解できなかった。

「おやおや、異世界が何かわからないようですね。

異世界とはアナタが前まで住んでいた世界とはかけはなれたものです。

スライムやドラゴンなどの『魔物』が世界にうようよいたり、魔術師、剣士、盗賊など色々な職業をやっている人たちが魔物を討伐したり、アイテムを採取したりと『クエスト』をこなして、

その報酬金で生活しているのです。どうですか？あなたの勤めていたブラック会社より簡単に金稼ぎができますよ」魔術師は言う。

「なるほど・・・しかし俺が異世界にいきたくないと言ったらどうなるんだ？」

「それもアナタの判断です。まあその時はアナタをそのまま死後の世界へと送りますがね」

俺は考え込んだ。今まで生きていてろくなことはあったろうか？もしこのまま異世界に行ったとしても楽しく生活していけるのだろうか？

俺は考え込んだ。・・・そして結論をだした。

「俺は異世界で金を荒稼ぎしたいんだ。だから異世界に行くことにする。」俺は言った。

実際、俺はこの世界を通して自分を変えようと思ったのだ。

「わかりました。それでは目をつぶってください。

そして目を開けたときには広い草原がある場所にあなたはいるでしょう。

そこでアナタは私を見つけ出して話しかけてください。」そう言い残し魔術師は消えていった。

「これから俺の第二の人生が始まる・・・」俺はそのまま目をつぶった。

今から俺の異世界での人生が始まるのだ。

目を開けると俺は魔術師の言ったとおり、草原にいた。

「ここはどこだ？」俺は魔術師を探し始めた。

俺がしばらく草原の周りを搜索していると小屋のような場所を見つけた。

「お待ちしていましたよ」魔術師はその小屋からでてきた。

「では早速異世界について詳しく説明しますね。

この異世界で生活をしていくに働かなくてはいけません。

しかし働くといってもそんな簡単にはいきません。

ギルドに登録し、そのギルドでクエスト受けて、魔物を倒さなくてはいけません。

そこでアナタにはこれから私と修行してもらいます。

あなたが異世界で生活できるようになったら私がいいギルドを紹介します。

そこでアナタは生活してもらいます。まあ私の修行を乗り越えられたらですけど」

「おいおい、そんな面倒なことするんですか」俺は呆れた口調で言った。

「じゃあ早速炎の魔術を習得する修行を始めましょうか」魔術師は俺を完璧スルー。

そして魔術師は俺の腕を掴んだ後、なにかの呪文を唱え始めた。

次の瞬間、俺は先程までいた草原とは全く違う場所にいた。そこは、周りを崖に囲まれており、ごつごつした岩が転がっている場所だった。

「では、早速修行を始めます」魔術師は右手をだした。

「炎の精霊よ、私の体に力を示せ！ファイアボール！」
魔術師の右手から炎がでてきて、球体を作り出す。

その炎の球体を魔術師は崖の方に投げた。
すると、崖の上にあった大木に直撃し、大木が折れて炎が木に移った。

あっという間に勇ましかった大木はただの切り株と炭になってしまった。

「どうです？簡単でしょ？」

第1話 「俺、異世界に転生する」 (後書き)

感想・評価などお待ちしております！

第2話 「俺、初勝利する」 (前書き)

今回は、色々な技を覚えた広幸が
初めて魔物と戦う話です。
ちよつとギャグも入れてみました！

第2話 「俺、初勝利する」

「どうです？簡単でしょ？」魔術師はニヤリと笑い言った。

「簡単じゃねーよ！」俺はツツコミを入れた。

「まあまあそんな焦んなくても一から教えますから」魔術師は俺の怒りを抑えるように言った。

—————こうして俺と魔術師の修行は始まったのだ……—————

「ハア……ハア……」

「凄い集中力と頭の回転力……アナタは本当にダメでクズな生きる価値のない人間だったのですか？」魔術師は言う。

「まあ集中力の持続はハードブラック会社で鍛えられましたから。それと俺のことをダメでクズな生きる価値のない人間って言うのやめてくれますか？」

「冗談ですよ、冗談。でもここまで習得が早いのは予想外でした。」そう、俺は魔術師のスパルタな指導の元、いくつかの魔術を習得したのだ。

・ファイアボール

手のひらに炎の球体を作り出し、相手に投げつける攻撃魔法。

俺の場合、チャーハンがぎりぎり炊けないほどの火力。当然敵は焼き殺せない。

・アイススピア

手のひらに鋭利な氷を作り出し、相手に投げつける攻撃魔法。
俺の場合、つららとほぼ変わらない。

・イナズマアロー

雷の矢を形成し、相手に飛ばすことで雷撃を与える攻撃魔法。
俺の場合、乾電池一本分と同じくらいの電流・電圧。

・ウォータードリル

水を激しく回転させ、相手の体を削る攻撃魔法。
俺の場合、水洗トイレと変わらない回転力。

「・・・なんか俺の技全部カスくないですか？」俺は魔術師に聞く。

「そりゃそうですよ。あなたはまだ異世界に入って3日間しか経ってないじゃないですか。

魔力も戦闘を何度もしないと上がりにくいですし、それにあなたはダメ人間ですよ？」

そんなダメ人間が異世界に来てチートキャラになるなんて作者が許してくれると思います？」

魔術師は冷静に言った。その口調のせいで、俺のガラスのハートが粉々に割れた。

——それから、俺の魔術師の修行は1週間程続いた。——

「ハア・・・ハア・・・」

「もうだいぶ安定して魔術を使えるようになりましたね。
じゃあそろそろ実戦と行きましようか。」魔術師はそう言い、俺の

腕を掴んだ。

そして、俺と魔術師は前にいた草原へと移動した。

「じゃあ早速戦闘を始めましょう。ルールは簡単。

この草原に『ブルースライム』という、体が青い色の典型的なスライムが生息しています。

そのスライムを倒してきてください。

そうすればあなたを一人前の魔術師と認定して異世界の本当の舞台へと連れて行くことを約束しましょう。」

「ちょっと待ってください！俺まだそこまでの魔術は使えないですし……

魔術だって、日常生活を支える程度の貧弱なのしか使えないですもん」

「まあ頑張ってください」魔術師は人事のように俺の本音をスルーしやがった。

「まあやるしかないよな」俺はしょうがなく魔術師の言う通りにブルースライムを討伐しにでた。

「どこにいるんだろうか？」俺は草原をくまなく搜索する。

ちなみに視力は両目ともにA(2, 0)だ。ダメ人間な俺の唯一の自慢できるところだ。

そうこうしているうちに俺はお目当てのブルースライムを見つけた。

「不意打ちなら勝てるかもしれない！」俺は卑怯な手を使う。

なぜなら自分が勝つためなら手段を選ばないクズ人間だからだ。

「氷の精霊よ、我の体にその力を示せ！アイススピア！」

俺の手のひらに何本かのつららのようなものが出来上がる。

俺はそのつららのようなものをブルースライムめがけて投げつけた。

つららは奴の体に突き刺さる。

もちろん全くといっていいほどダメージを与えられなかった。

というより、俺のつららの完敗だ。あたった瞬間に、さきつちよが折れてしまった。

「グギギガ!!」スライムは俺の存在に気付き、勢いよく突進してきた。

スライムの発した鳴き声はあまりにも気持ち悪く、俺の中の貧弱でかわいらしいはずのスライムのイメージがぶち壊された。

「痛っ!」スライムの突進がモロに俺にHITした。

だけでも所詮はスライム俺と同じく雑魚キャラだ。俺は少しよろけただけだった。

「やっぱり、貧弱魔法じゃ倒すことは不可能か・・・」

俺は考え込んだ。自分の貧弱魔法でもあいつを倒せないかと。

そして俺はある方法を考え出した。早速準備にとりかかる。

「こっちまで来い!」俺はスライムから全速力で逃走した。

さすがにスライムは鈍足だった。小6並の俺の速さにも追いつけていない。

そして、俺はスライムとの距離をとった後、地面に向かって魔法を使った。

「水の精霊よ、我の体にその力を示せ!ウォータードリル!」

俺の手に空気中の水蒸気が集まり始め、できた水が手の周りを回転し始める。

そして地面に手を押し付けると、地面がだんだん削れはじめた。そして、ある程度の大きさの穴を作り上げた。

スライムはだんだんと迫ってくる。

「もう時間がないな・・・」俺は手にまとわりついている水を穴へと移した。

穴が水で満杯になる。そして、そこにスライムが飛び込んできた。

「グガガ？」スライムは水たまりの中に入った。

「今だ！雷の精霊よ、私の体はその力を示せ！イナズマアロー！」俺の手のひらに雷の矢が形成された。その矢を俺は、水たまりへと投げ込んだ。

「グガガガギ！！」スライムは感電した。

いくら乾電池並みの電流だったとはいえ、水は電気抵抗が少なく、スライムに電流がよく通る。

一瞬でスライムがクラゲのように水面に浮かび上がった。

「やったあー！！俺の初勝利だああ！」俺は嬉しさのあまり歓喜した。

そして俺はクラゲ化したスライムを掴んだ。

「うわあー・・・なんかぬめぬめして気持ち悪い・・・」

俺は初めて触るスライムの感触に嫌悪感を覚えた。

しかし、我慢して持ちながら魔術師の方へと向かっていった。

「持ち帰りましたよ、はい。」俺は魔術師にスライムを見せた。

「おお、おめでとうございます。やはりあなたならできると思ってましたよ。

……こ、これは!？」魔術師はスライムを見て驚いた。

「どうしたんですか？」

「このスライムは、どうやら青魔石を持っているようですね。

ほら、これを見てください。」魔術師はスライムを八つ裂きにして中の臓器をとりだした。

「何してるんですか!？気持ち悪いにも程がある!」俺は絶叫した。

「まあまあ、ほら、心臓の中に青い石のようなものがありますよね？これが青魔石というブルースライム特有の産物です。

この青魔石は売ると、お小遣い程度は稼げますよ。今回は私が買い取りましょう」

魔術師はそう言って俺に3000メールを差し出した。

※メールというのはこの異世界共通のお金だそうです。

1メール＝約1円と考えてください。

「こ、これは!？俺の月収より高い!……」

「ただだけあなたの会社の給料低かったんですか!」魔術師もさすがに驚いたらしい。

「そんなことはさておいて、これよりあなたを異世界の本当の舞台へと送りたいと思います。

あ、卒業祝いに色々とプレゼントを用意しましたよ。」魔術師はそう言って袋を差し出した。

そして俺は腕をつかまれ、またもや転送された。

俺が目を開けると、そこにはたくさんの人がいて、賑わっている街であった。
中には色々と入っていた。それぞれの物品に説明書のようなものがついている。

・ 3万メイル

このお金で宿屋に泊まってください。

・ ヒュペノイドコールス

あなたの住んでた世界でいう、携帯電話と同じようなものです。
なにか質問等ありましたら、電話してください。

・ 女性用下着

あなたの住んでた世界でいう、パンティと同じようなものです。
きっとこの先あなたを助けってくれると思います。

「いらねえわ！なんの役に立つんだよ！」俺はツツコミを入れた。

・ 森羅万象携帯用図鑑

あなたの住んでた世界でいう、ポ●モン図鑑と同じです。
戦った相手の情報、産物や、アイテム、地図、などなど
多彩な機能を持ち合わせた高性能なアイテムです。
こいつでポケモンゲットだぜ！

「なんか小説の趣旨変わっちゃってるよ！」俺はまたもやツツコミを入れた。

そうして中身の物品を全部確認し終えた。
あと、もう一つ中に手紙が入っていた。

「広幸君へ、今君がこの手紙を読んでいるとしたら君は賑わっている街にいったところでしよう。」

今あなたがいるところはブロンダ街です。

そこにかつて私の相棒であった男の勤めているギルドがあります。
彼には君の事を説明しているので、ギルドに登録させてもらえらると思います。

そこで、ギルドに向かってください。そして、登録をしてください。
場所はポ●モン図鑑・・・じゃなくて、森羅万象携帯用図鑑に掲載されています。

では、よい異世界生活を」

「なるほどな・・・これか」俺は図鑑を取り出した。
そしてギルドの方へと走り出していった。

―――目線…魔術師―――

あれほどまであの男ができる奴だとは思っていませんでしたね。
やはり私の見込んだだけの奴ではありません。

この先、あのギルドの奴らと仲良くできるといいんですが・・・
まあ私はアナタの生活を楽しませていただきますよ・・・広幸君



残高… 0メール

収入… 33000メール

支出… 0メール

合計.. 33000メール

第2話 「俺、初勝利する」 (後書き)

感想・評価などお待ちしております！

第3話 「俺、ギルドに登録する」 (前書き)

今回は広幸がギルドに登録をするお話です。
早くも美少女キャラが登場しました。
恋の展開も考えていかねば・・・

第3話 「俺、ギルドに登録する」

「ここが魔術師の言ってたギルドか」俺はギルドにたどり着いた。

ギルドは3階建てぐらいになっており、大きく「PUNISHMENT」と書かれている。

ちなみにPUNISHMENTと言うのは、『罰』という意味だ。なんとも気味の悪い名前だな。

とりあえず俺はギルドの中に入っていた。

中は酒場のようにっており、壁のボードにはびっしりとクエストが貼られていた。

俺は周りの奴らに奇妙な目で見られる。どうやらあまり歓迎されていないらしい。

俺は周りの目を気にせずに、バーカウンターの方へと歩いていった。

「何を飲みますか？」バーテンダーは聞いてくる。

「いや、ちょっとギルドに登録したいんだが・・・」俺はそう言った。

すると、周りの奴らの目の色が豹変し、みんな寄ってきた。

ちょっと気味が悪いと思いつつも、俺はその場に立ち止まっているとその中から一人が話しかけてきた。

「おい、お前ここをどこだと思っているんだ？」そいつは言った。

「いや、普通にただのギルドだと思っているけど・・・」俺は普通

に返答した。

「ふざけてんじゃないねえ!! クソガキが!」俺はそいつに殴られた。周りの奴らが止めにかかる。俺はフラつきながらも、バーテンダーに聞いた。

「なんであいつ怒っているんですか?」バーテンダーは答える。

「しょうがないですよ。このギルドの奴らは気性が荒くてね。

特に今のやつ、ペスカは誰よりも新人が嫌いなんですよ。

それより、本当にこのギルドに登録していいんですか?

まあいいと言うのならオーナーの所で手続きしてきてください。オーナーは3階にいます。」

「まあご丁寧にありがとうございます」俺はオーナーのいる3階へと向かっていった。

——目線・ペスカ——

なんか変な新人がこのこと入ってきやがった。

そいつはなんだかわかんないけど一番腹がたつ奴だった。

俺はそいつに聞いてみたんだ。

「おい、お前ここをどこだと思っているんだ?」と。すると奴は、

「いや、普通にただのギルドだと思っているけど・・・」って答えた。

なめてやがると俺は思ったんだ。そして気付いたらそいつを殴っていた。

全く、気に食わないがギルドに入るならしょうがない。

でもできるだけかわらないようにしておこう。

「ここがオーナーのいる部屋か」俺はドアを開けようとした。ドアの取っ手を掴んだ瞬間、俺は思わず身震いをした。

中にものすごい奴がいる、それを肌で感じたんだ。

しかしもう後戻りはできない。俺はあいつに殴られてから思ったんだ。

「絶対にこのギルドに入って、あいつを超えてやる」と。

俺は勢いよくドアを開いた。

「すいません！ここのギルドに登録したいんですが」

椅子に座っていた男は立ち上がった。男はとても巨大な体で、もの凄い筋肉であった。

「なんだ？お前が魔術師ロウの言ってた男か？」巨大な男は言う。

「はい。私はロウ師匠に魔術を教えていただき、このギルドに入りたいと志願しました。」

こういう時はあんな野郎にでも敬意を表さなくては。

「よかろう。あいつの頼みごとだ。・・・それに何よりお前は面白そうな感じがする。」

「はい？」・・・この男、全く意味がわからん。

「お前、元からこの異世界にいたわけでは無いな」男は言った。この男、どうやらただものでは無いらしい、と俺は感じた。

そして俺は正直に全てのことを話すことにした。

「なるほどな・・・お前は一度死んでおり、ロウによって異世界に転生されたわけだな。

そのような奴は他にも何人も見てきたぞ。まあどいつも死んでしまったがな」

「そんな恐ろしいこといわないでくださいよ！」俺は身を震わせ言った。

どうやら転生されてきた奴らは俺以外にもたくさんいるらしい。

しかし、異世界は前の世界にあったゲームのように進まず、だいたい奴は魔物に殺されてしまうそうだ。

「ははは、まあお前にはなにか特別なものを感じる。・・・よし！ギルド登録の許可をしよう！これからお前はこのギルドの一員だ！この世の中の平和のためにクエストをこなしてくれ！」

「わかりました。でもこれだけは言わせてください。

俺は平和なんかのためにクエストはやりません。全ては金を稼ぐためだけです」俺は言う。

カッコよく言ってみたが、内容は金目当てのただのクズ人間だ。

「ハハハハハ！！こいつは面白い野郎だ！

あ、自己紹介がまだだったな。俺はギルド『PUNISHMENT』のオーナー、カーキ・フレアだ！

これからよろしく頼むぜ。早速だが、お前はこの街をあまり知らないようだ。

ちよっとギルドの一員に案内してもらおうように頼んどくよ」とフレアは言った。

「わかりました。これからよろしくお願いします！」俺は頭を下げて言った。

これから俺の金稼ぎが始まるのだ、と思うと喜びを抑え切れなかった。

しかし、異世界生活はそんな簡単にいくものでもなかった。――

―――目線…魔術師ロウ―――

「どうやら無事にギルドに登録できたようですね」私は広幸と電話していた。

「はい、ちょっと気に食わない奴がいましたけど・・・」彼は言う。

「やはりそうでしたか・・・まあこれから彼らと打ち解けていってくださいね。

あ、あとギルドでは単体行動もいいですが、パーティーを組んでおいた方がいいですよ」

「なるほど・・・まあ誰か気の合いそうな奴がいたら組めますよ。それじゃあ」彼は電話をきった。

やはり、彼は面白い。面白いですよ。

こっそりフレアとの会話を聞いていましたが、金目当てでクエストをやる、とオーナーに堂々と言える人がいるでしょうか？

彼にはどくどくの魅力がありますね、それが裏目にでないといいのですが・・・

「まあもう少し楽しませてもらいましょうか、広幸君」

———目線…広幸———

俺はちゃんとギルドに入会することができた。

そして俺は今、人生最大のチャンスを迎えている。

俺は剣士をやっているらしい女の人にこの街を案内してもらうのだ。その女の子が尋常なないほどにかわいい。てか一目惚れしてしまった。

その女の子は青色の瞳をしていて、まさに異世界って感じだった。髪の毛は茶色で長髪、身長は俺より少し低いくらいだ。

そして、顔は整っており、女優をやっているくらい的美形であった。

スタイルも抜群。くびれているお腹、足もけっこう長い、更に豊かな胸で、モデル体型であった。

これは尋常じゃない。写真を撮って見せてあげたいくらいだ。

まあこの世界にデジタルカメラなどという機械は無いのだろうか。

「あ、あの、そ、その、こ、今回は宜しくお願いしますううう！」ダメだ。ありえないほど緊張する。先程から手汗が半端じゃない。

「そんな緊張しなくてもいいんだよーこちらこそ宜しくね！」女の子は普通に話しかけてきた。

声もかわいい。もう全てがかawaii。

でも俺みたいなダメ人間が手をだしてはいけない存在なんだ、と俺は痛感した。

「よ、よろしく。俺の名前はヒロユキ。君の名前は？」俺は震えを

こらえ、なんとか話した。

「私の名前は、ハーブ！剣士をやっているの。でも私も3日前にギルドに入ったばかりで・・

あ、でもヒロユキよりは先輩だねっ」ハーブは今以上に近くに寄りそってきた。

もうダメだ！！俺の心臓が張り裂けそうううう！！

俺は初めて恋というものを知った。

「じゃあぎっくり街案内するよー」そう言いながらハーブは俺の手を握ってきた。

「ちょ、ちょ、ちょお！！！」俺は顔を真っ赤に染めた。

「こうしてると、恋人同士みたいでしょ？・・・ダメ・・・かな？」ハーブは俺に上目遣いを使ってきた。これがもうたまりませえええん！！

「は、はやく、あ、案内、し、してくれよ」もうカタコトで何を言ってるのかわからない。

「はいはい、はじめにここが武器屋だよー！

ここでおおかたの武器は買うことができるからお金に余裕があったら買うといいよー！

ちなみに武器は強化することもできるの！詳しくは店長にきくといいよ。じゃあ次ね！」

俺はハーブに手を引っ張られ、道具屋、雑貨屋、宿屋など々と、色々な場所に手を握られたまま案内された。

「きよ、今日は色々教えてくれてありがとな。じゃあ俺は宿屋に泊まりに行くわ」

「こちらこそ楽しかったよ！じゃあ明日ギルドでねー」ハーブはそう言っ人ごみに消えていった。

「ハーブか・・・覚えておこう」俺は宿屋を目指した。

————目線…ハーブ————

今日は面白い少年に出会った。

私が悪戯でちよつと手を握ってみたら頬を真っ赤に染めてた。なんだろう、すごくかわいかった。私、ちよつとあの人のこと好きなのかも・・・

まあ、ちよつと案内しただけだし気のせいよね。

明日一緒にクエストに行ってみようかな。ちよつと気になるし。

「あー明日が楽しみだなー」そうつぶやき、私は家の中へと入っていた。

————目線…広幸————

「すいません。ちよつと今月、この宿に泊まりたいんですけど」俺は宿屋の人に言った。

え？なぜ、1ヶ月単位で泊まるかって？そりゃこっちのほうが安く

すむからだよ。

こういうのって、一日で泊まるのより、一ヶ月で泊まったほうが少しだけ一日あたりの値段が下がるんだよね。俺はちょっとした節約をした。

「わかりました。では30000メール頂戴致します。」

げっ！！高いな！・でも一日なら1500メール、つまり一ヶ月ではだいたい45000メールってところだな。これなら15000メールの得だ。これくらいは我慢しよう。

「はい、どうぞ」俺は30000メールを差し出した。

「確かにいただきました。ではこちらが部屋の鍵です。

鍵をなくした際は、追加で5000メール支払っていただきますのでご了承お願いします。」

「はいはい」俺はそう言って鍵を受け取り、自分の部屋へと向かっていった。

「ここが俺の部屋か」

部屋はけっこう広かった。2LDKで、寝室にはベッドがあらかじめついている。

30000メールでこの部屋はなかなかのものだろう。

「明日から俺の異世界生活が始まるんだな」俺はベッドに横たわり目を閉じた。

明日から俺の金稼ぎが始まる。そう思うと、俺はうきうきしてしょうがなかった。――――

◆	合計	◆	残高	◆
◇	..	◇	..	◇
◆	3	◇	3	◆
◆	0	◇	0	◇
◇	0	◆	0	◇
◆	0	◇	0	◆
◇	メ	◇	メ	◇
◆	イル	◆	イル	◆

第3話 「俺、ギルドに登録する」 (後書き)

感想・評価お待ちしております！

主人公の魔法、キャラクターなどのアイデアも募集しているので何かあったら是非お願いします！

第4話 採取クエスト『葉草納品』（4500メール）（前書き）

今回は広幸の初仕事です。

ちよつと適當になつてしまいましたが勘弁してください W W

第4話 採取クエスト『薬草納品』（4500メートル）

——目線・広幸——

気持ちのいい朝、昔の世界とは変わらずに俺はカーテンを開いた。少なくとも、こんな気持ちの悪い生き物が空を飛んでいなければの話だが。

「グエエエ！」たくさんのドラゴンが飛び交っている。

「やっぱりここは異世界なんだよな」俺はドラゴンを見てここが異世界なことを思い出す。

そう、この世界はRPGゲームでしか想像もできないような『魔物』が生息する世界なのだ。

俺はギルドへと向かった。今日が俺の初仕事なのだ。

そして俺はギルドへと到着すると、ボードを見始めた。

「まずは簡単そうなクエストからだな。」俺は採取クエストを探し始めた。

そう、採取クエストは比較的初心者向けのクエストである。

戦闘を避ける事だって可能なわけだ。俺の雑魚魔法では勝てる気がしないので俺はこの採取クエストを選んだ。

「ほうほう、『薬草納品』か・・・割と簡単な仕事だな。

内容は?・・・薬草10gで300メートル支払います、か。よしこのクエストにしよう」

俺は薬草を採取するクエストを引き受けた。するとそこに聞き覚えのある声の女がやってきた。

「ヒロユキー！一緒にクエスト行こー！」

そう、そいつはハーブだった。やばいやばいやばい周りの男達がいっつと見ている。

どうやら嫉妬されているようだった。早く俺はこの場から逃げ出したい。

「お、おい、周りが見てるんだけど・・・」俺はハーブにささやいた。

「じゃあ早くクエストに行こうよー！そうじゃなきゃ・・・泣いちゃうよ？」

ハーブは目をうるうるさせて言った。

「ぐっ！・・・わかったわかったから！！泣くな！」俺は必死に言った。

・・・ハーブめ、随分と卑怯な手を使いやがって・・・

もしこんなところで泣かれては、俺がいかに悪役と勘違いされてしまう。

もちろんハーブのことが好きな奴らは俺に襲い掛かるであろう。

「やったー！ヒロユキとデートだあ！」ハーブは大声で言った。

その瞬間、俺は周りから殺気を感じた。どうやら誤解されたらしい。でも今は誤解を解いている場合ではない。

俺はハーブを手を掴んでギルドから急いで飛び出した。

「・・・お前のせいで大変な目にあったじゃないか」俺はハーブに言った。

「まあまあ気にしないでいいんじゃないかなー？」

「気にするよ！またギルドに戻ったら大変な目に遭いそうで怖いよ！」俺は言った。

「それよりヒロユキ、なんのクエストに行くの？」ハープは聞いてくる。

「そうだな、まずは安全なこの薬草採取のクエストに行こうと思う」

「よし、それじゃあ出発ー！！」

「ちょ、ちょ、ちょまってえええいいい！」ハープは俺の腕を掴んで強引に引っ張っていった。

「ここが今回の場所か・・・」俺とハープは広い森へと来ていた。

この世界には色々は場所がある。

フィールド

火山・氷山・洞窟・地下など様々な場所があり、その場所に応じてでてくる魔物、強さ、クエストの難易度が変わってくるのだ。

今回俺達は一番簡単な場所の、『森林』へと来ている。

俺は早速、図鑑を開いて出現する魔物を調べた。

どうやら出現する魔物は、

・ブルースライム

初期の雑魚モンスター。体で体当たりをして攻撃するが、ダメージはほぼ0だ。

産物…『青魔石』300メイル〜3000メイル

・ゴブリン

初期の雑魚モンスター。手に持っている何かの動物の骨で攻撃してくる。

ブルースライムよりは強烈だが、決して強くは無い。

産物…『ゴブリンの毛皮』500メイル〜300メイル

この2体ぐらいらしい。これなら俺の雑魚魔術でも撃退できるかもしれない。

まあ薬草目当てだから戦闘はなるべく避けるけどね。

「じゃあ私はどうすればいいー？」

「そうだな、とりあえず薬草を採取しまくってきてくれ。

俺はちよつといいことを考えたんだ。」俺はハーブに指示した。

「わかったよ！たくさんとってくるからねー」ハーブは走り出していった。

「さてと・・・俺もとりかかるか」俺はニヤリと笑ってハーブと反対方向へ向かっていった。

———目線…ハーブ———

私は今、ヒロユキとクエストにきているんだ。

クエストはかなり地味なやつだけど、ヒロユキと一緒にならなんでもいいや！

薬草もだいぶ集まってきたし、ちよつと魔物でも倒してみようかな。

「あ、あんなところにゴブリン発見ー！」私は腰につけていた剣を抜いて接近する。

ゴブリンはまだこっちに気付いていないようだよ。

「チャンスー！」私は剣をゴブリンに振りかざした。

「ゴブゴブゴブ！！」剣はゴブリンに突き刺さった。

どうやらゴブリンはお怒りの様子なんだよ。

ゴブリンが襲い掛かってきた。私はもう一度剣を振りかざす。

「ゴブブ・・・」ゴブリンは瀕死になったんだよ。

「とどめだー！」私はゴブリンの心臓に剣を突き刺した。

「やったー！初めて一人で倒せたよ！」私は初めて魔物を倒したことに感動を覚えた。

しかし、そんな私も感動も一瞬で壊れてしまった。

「ゴブブゴブブ・・・」周りからゾロゾロとゴブリン達が現れる。

一瞬で私はゴブリンに囲まれてしまったの！

「きゃあああああ！！！！」

————目線…広幸————

「きゃあああああ！！！！」俺はハーブの悲鳴を聞いた。

「美少女がピンチなら、助けに行くフラグが強制的に立っちゃうんだ！」俺は痛感した。

ハーブになにかなければいいんだが・・・

俺はハーブのいる場所にたどり着いた。どうやらゴブリンに囲まれ

ているらしい。

「ハーブ！助けに来たぞ！」

「ヒロユキ！ありがとう！こいつらなんてぶっ飛ばしちゃって!!」
その言葉は俺の心に突き刺さる。

「・・・ごめん、俺の魔術、殺傷能力ないんだよね・・・こいつらなんて殺せないよ・・・」

「え・・・」俺とハーブの間に沈黙が生まれる。

「ゴブゴブ！」どうやらゴブリン達は俺に気付いたらしく、襲い掛かってきた。

「・・・ったく、やるしかないよな！ハーブ！ちょっと協力してくれ！」

「わかったわ!・・・何をすればいいの？」ハーブはゴブリン達を押しわけ、俺の方へやってきた。

「そうだな・・・周りの木を切り倒してくれ！」俺はゴブリン達の気をひきつけながら言った。

そして、俺の作戦が始まった。

「ある程度は切り落としたよ！」ハーブは息を切らして言った。
さすがに4本もの木を切り倒すのはきついであろう。

ハーブは俺の理想通りに切り倒した木で四角形をつくってくれた。

「よし。ありがとう。じゃあちよつと離れておくんだ。」
俺もゴブリン達から逃げつつも色々と準備を終えていた。

俺はゴブリンをひきつけながら木でできた四角形の中におびき寄せた。

「今だ！炎の精霊よ、私の体にその力を示せ！ファイアボール！」

俺の手からチャーハンが炊けないほどの炎の球が発射された。
それと同時に、俺は木でできた四角形から外側に出る。

その球はゴブリンに当たるのではなく、木へと直撃して引火した。

「ゴブゴブ？」 あっという間に火は木から木へと移り、
ゴブリンの逃げ場を完全に塞いだ。

「これでなんとかなったな。とりあえず薬草集めて帰るか」俺は言
った。

俺らは薬草を集め終わり、ギルドへと戻ってきた。

「これが今回の依頼の納品物です。」俺はフレアに薬草を渡した。

「おお、これは大量だな。ふむふむ・・・100gというところか。
よし、報酬だ！ありがたく受け取れ！」俺は薬草と交換で報酬金を
もらった。

100gということで3000マイル、

ハーブと山分けするので1500マイルだな。なかなかの稼ぎだ。

「じゃあ帰りますね。」俺らはギルドを後にしようとした。

その時、「あんなにたくさんのお草で取ってきたのー？」とハーブが聞いてきた。

「おい、俺は金稼ぎのためなんでもするんだぜ？」

お草に似ている葉っぱを適当に入れといたからあんなに稼げたんだよ。」

「・・・最悪」ハーブに軽蔑的な目で見られてしまった。

そして俺はギルドを出る。その瞬間に俺は周りから殺気を感じた。

「おい、お前、どうなるかわかってんだよね？」

それは、男達だった。そうか、誤解はまだ解けていなかったんだ。

「なんでこうなるんだあああああ！」

―――目線；ハーブ―――

ヒロユキはただのダメ人間だった。

お草のかわりに変なお草いれるし、まともな魔術は使えないし・・・

でも、助けにくてくれたヒロユキすつごくかっこよかったんだよ！
また今度も一緒にクエスト行けるといいな。

第4話 採取クエスト『葉草納品』（4500メール）（後書き）

今度は討伐クエストを書いてみたいと思います。

その前にハーブの邪魔をする美少女キャラもだしてみたいけど・・・

感想・評価・お気に入り登録お待ちしております！

第5話 討伐クエスト『ブルースライムの宴』〈前編〉(前書き)

今回は2話にわけてみます。

一話一話は短いですが、内容を濃くしようと思います

第5話 討伐クエスト『ブルースライムの宴』（前編）

——目線…広幸——

俺の荒稼ぎ生活2日目。まだ異世界には慣れていない。

俺は質素な食事（100メートル程度のやつ）を食べてギルドへと向かった。

「なんかいいクエストないかな？」俺はギルドにつくなり、ボードを見始める。

その時、魔術師から電話がかかってきた。

「はい、もしもし」

「もしもし、私です。異世界生活は楽しんでいますか？」

「なんか稼ぎやすくて楽しいです。魔術が強ければもっといいんですけど・・・」

「まあまあそれはしょうがないです。そこであなたの参考程度になればいいと思って電話しました。

まず、金を稼ぐために簡単なクエストをたくさんやるのもいいですけど、

討伐クエストをやってみてください。

採取クエストよりは難易度は高いですけど、報酬が高めです。

そして、産物を獲得すると、それを売ってボーナス報酬もゲットできますし、

魔物を倒すことで、経験値的なのが溜まって魔力が上がります。

つまり、強力な魔術を発動することもできるようになります。どう

ですか？」

「なるほど。確かに俺にとっての利益は大きいですね。

じゃあそうします。では」俺はアドバイスをもらって電話を切った。

「じゃあこれで行くか」俺が選んだのはこのクエスト

『ブルースライムの宴』

・基本報酬 一体につき、500メイル

・産物『青魔石』 一個につき、500メイル

だそうです。

俺はクエストを受注し、ギルドをあとにした。

途中、雑貨屋に寄って『イグリユスの羽』（500メイル×5）を
買う。

（凶鑑データ）

イグリユスの羽。森林に生息するイグリユスの翼から入手した羽。
非常に油を含んでおり、ある程度の衝撃を与えると着火する。

俺は羽に衝撃を与えないようにして森林へと向かった。

森林に着いた。それと同時に俺は森のなかへと入っていく。

「ここはいい場所だな。」俺は森の中の広いスペースを見つけ出した。

え？何をしているかって？簡単じゃないか。俺が普通に戦うとでも

思ってるか？

罨を仕掛けてスライム達を一網打尽にしてがっばり稼ぐのだよ。

俺は早速は周りの草を大量に引き抜いた。

「草はOK。水の精霊よ、私の体にその力を示せ！ウォータードリル！」

俺の手から水洗トイレ並の回転力の水流ができあがる。

それで地面を削り、そこそこのサイズの穴を掘る。

そしてそこに、先程引っこ抜いた草と、イグリュスの羽を入れる。

この罨を1時間程かけて5つ作り上げた。

「さてと、罨は完成だ。それじゃあ奴らを集めに行くか。」俺は森の奥へと入っていった。

早速何体かのスライムを見つけた。

「ひゃっほう！」俺はスライムに飛び蹴りを入れた。

当然ダメ人間な俺の蹴りの威力はほぼ0だ。スライム様はどうやらお怒りの様子。

「グガガギガ！！」その奇妙な鳴き声と共に、周りから大量のスライムが集まりだす。

ざっと30体は超えたであろう。俺はその数に恐怖と歓喜の入り混じった複雑な感情を覚えた。

「やーいやーいバカ共が！こっちまで来いよ！」俺は挑発しながら逃走した。

スライムたちは俺を追いかけてきている。このまま罠のところまで逃げ切れれば俺の勝ちだ。

俺は気付けば小6並の足の速さから、中1並までと進化をとげていた。

・・・といってもポツチャリ系の中1と変わらないが。

俺は遅いながらも必死に罠のほうへと走る。

そして、なんとか罠のところまでたどり着くことができた。

「百方！俺の勝ちだぜえええええ！！」スライムたちは俺の後ろを追ってくる。

そして次々と罠に引っかかり始めた。

罠の場所に乗っかると同時に、羽が衝撃によって着火し、草へと引火する。そして、見事スライムの丸焼けの完成というわけだ。

あっという間に俺を追ってきたスライム達計30体は丸焼けになった。

表面が焦げてボロボロになってるが、産物を取るために切り開くと、中は生温かくてドロドロしている感じがたまらなく気持ち悪い。

とりあえず俺は、『青魔石』を10個ほど手に入れた。

そして、森林をあとにしようとした。

その時、空から巨大な魔物が現れる。

褐色の翼を持ち、尻尾が長く、くちばしのついている鳥と龍の混ざったような魔物だ。

しかし、俺はその翼に見覚えがあった。

そう、この魔物は、本物のイグリュスだった。

第5話 討伐クエスト『ブルースライムの宴』〈前編〉(後書き)

続きは明日のお楽しみ〜w w

感想・評価・お気に入り登録お待ちしております！

第6話 討伐クエスト『ブルースライムの宴』(後編)(前書き)

今回で初めての討伐クエストの話は終わりです。
今回はあのキャラが・・・??? って感じです。

第6話 討伐クエスト『ブルースライムの宴』（後編）

俺がブルースライム討伐を終え、産物を取り出した後、ギルドに帰ろうとしたときに、

あの褐色の羽を持つ龍の魔物『イグリユス』が現れる。

俺は果たして逃げられるのか！？――

「グエエエエ！！」イグリユスは色々となぞめいた奇声を発した。スライムよりも気持ちの悪い声は、俺をイラっとさせた。

「まったく、今はお前とやりやってられねえんだよ」俺は青魔石を抱えながら逃走する。

すると、後ろからイグリユスが攻撃してくるのを見た。

「グエエエエエ！！」イグリユスは翼を大きく広げる。

すると、勢いよく回転し始め、羽を飛ばしてきた。

羽は途中で炎をまとい始めた。

あいつの羽は非常に油を含んでいる。そして空気抵抗により炎がついたのだ。

炎をまとった羽は俺に直撃する。

「うお！！熱っ！！」俺は羽に当たったが、致命傷は避けられた。しかし、炎は周りの草木へと移る。早く逃げないと逃げ場がなくなってしまう。

俺は青魔石だけは捨てずに、なんとか逃げようとした。

しかし、イグリュスは俺をしつこく追ってくる。

「グエエエエエエエエ！」「再びイグリュスは回転を始めた。回転の勢いは先程よりも増しており、かなりの羽を飛ばしてくるであろうと俺は考えた。

「これがラストチャンスだな」俺は燃えてない場所へと必死に走る。

しかし、あと一歩遅かった。

横で燃えている木が倒れ、俺の逃げ場所を完全に塞いだ。

「くっ！！万事休すか！」俺は奴の大量の羽の猛攻をあびて力尽きるのかと考えると、足の震えが止まらなくなってしまった。

「グエエエエエエ！」「先程の3倍近くの量の奴の羽が俺めがけて飛んできく。

俺は思った。ここで異世界ライフも幕を閉じるんだな、と。

しかし、俺の考えは単なる妄想にすぎなかった。

「おい、新入り！なにしてんだ！早く逃げろ！」ずぶとい声が聞こえ、

俺めがけて飛んできた羽が全て凍りついた。

そして俺の目の前には大きな剣をかついだ、見覚えのある男が立っていた。

それは最初に俺がギルドに訪れたときに俺を殴ってきた奴、ペスカであった。

「お、お前は!？」

「うるせえ! 早く逃げろっていつてんだよ!」 ペスカは怒鳴った。

「あ、ありがとう。」 俺は青魔石を抱え逃走した。

————— 目線…ペスカ —————

「やっといなくなったか」 俺は剣をイグリユスへと構えた。

「グエエエエ!」 イグリユスは随分と怒っている。
翼を大きく広げ、勢いよくダイブしてきた。

「ったくよ・・・面倒だな」 俺は剣を襲い掛かってくる奴の顔面にぶつけた。

「グギヤアアア!!」 イグリユスは痛みに絶叫した。

あいつの顔は凍り始めた。え? なぜそんなことができると?

俺の一番得意な魔術なんだが、『アイスブレイク』という魔術がある。

この魔術は簡単に言えば、自分の体から絶対零度に近い温度の冷気を出して、

その冷気を武器にまわりつかせて攻撃しているんだ。

だから武器に触れた瞬間にだいたいのものは凍りつく。

「グエエエエエ!」 俺が説明をしているうちに奴は自分の翼を燃やし始めて

氷を溶かしているようだ。

ちなみにイグリユスは翼全体を燃やし始めると、もうかなり弱っている証拠だ。

それと同時にあいつも覚悟を決め、今まで以上に猛攻をしてくる。

「ギャアアア！！」イグリユスは空へと大きく舞い上がった。

その姿は、不死鳥を連想させる。まあ死にかけだから不死鳥というよりは瀕死鳥だけど。

「グギャアア！！」奴は俺のボケをスルーし、上空から一気に俺の方へ下降してきた。

「とどめだ！」俺は剣を飛んでくるあいつへと大きく振りかざす。剣が頭へとモロにHITする。そして、イグリユスは動かなくなつた。

「よし、帰るか」俺は、イグリユスを担ぎ上げて、ギルドへと向かっていった。

————目線…広幸————

まさかあいつに助けられるとは思ってもいなかった。

あいつは本当はいい奴なのだろうか・・・俺は疑問に思う。

「とりあえず後でお礼は言わないとな」俺は報酬金を受け取り、あいつの帰りをまつた。

ちなみに今回の報酬は、

基本報酬…15000メール

産物報酬…5000メール

だ。かなり上出来であろう。

「おう、帰ったぞ」そしてあいつは帰ってきた。イグリユスを担い

で。

「おお！これは大きいイグリュスだな！」周りの奴らがペスカにたかる。

そいつらを蹴散らしながらペスカは報酬金をもらいにきた。

ざっと見たところ、1万メイルくらいはあった。猛烈に金がほしくなった。

しかし、俺はそんな恥ずかしい感情を押さえ込み、お礼をした。

「さっきはありがとな。」

「気にするな。あいつは俺の獲物だった。そこにお前がいて邪魔くさかっただけだ。」

やはりこいつは一言一言ムカつくやつだ。しかしここは大人になろう。

「ああ、お前のおかげで助かったよ。本当にありがとう。」

「べ、べ、べ、べつに気にするなど言ってるだろ！」少しペスカの顔が赤くなっている。

「こ、これは、お、お前の入団祝いの、プ、プレゼントだ！」
そう言ってペスカは1万メイルを差し出してきた。俺はものすごく興奮した。

「本当にくれるのか？」

「ああ。お、俺の目的はイグリュスの素材だしな。」・・・嘘が下

手なやつめ。

「ありがとう！今度は一緒にクエストいこうな！」

「あ、あの、俺、俺はお前のこと気に入ったわけじゃ・・・」

俺は最後までペスカが喋り終える前にギルドを後にした。

「あいつ・・・結構いい奴じゃないか」俺はちよつと嬉しかった。

———目線…ペスカ———

やっぱりあいつは色々とおかしい。

人の話は最後まで聞けよっつの。

でも、俺は少しあいつのことが気に入った。

ん？なぜかって？それはだな・・・あいつには何か他の奴には無いものを感じる。

あの戦い方、普通の奴ならまず考え付かないだろう。

でもあいつはそんなせこい手を使ってスライムを一網打尽にしていた。

あいつはもの凄く頭のキレる奴だ、と俺は考えたんだ。

今度一緒にクエストって観察してみるのも面白いかな・・・

◆◆◆◆◆

残高.. 4500メール

収入.. 30000メール

支出.. 100メール

合計.. 34400メール

第6話 討伐クエスト『ブルースライムの宴』〈後編〉（後書き）

どうでしたか？

感想・評価がもらえたりするとかなり嬉しいです。

めっちゃ小説頑張ります。

できれば感想・評価・お気に入り登録してもらいたいです。

てかしてくださいwwお願いします！！

第7話 討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』 ～前編～ (前書き)

今回も討伐クエストを入れてみました。

そろそろハーブもだしたほうがいいのかな・・・

第7話 討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』〈前編〉

——目線…広幸——

荒稼ぎ生活3日目。俺は、かなり昨日頑張って稼ぎまくったため、今日のご飯は奮発することにした。もしかしたら人生初の贅沢なのかもしれない。

本日のメニューは魔物の肉、かなり栄養価の高い野菜、炭酸ジュースという豪華な物だ。

ちなみに今日のご飯には3000メイルを注いだ。これだけあったら一ヶ月は持つ食費なのに。

「びゃあゝあゝあうまひいゝいいゝ」

俺はあまりにも興奮してしまい、マ●オさんのものになってしまった。

さあ、俺はひと時の幸せを味わった後、また今日も荒稼ぎへと行くのだ。

「さてと・・・なんかいいクエストないかな・・・」

俺は討伐クエストの中でも簡単そうなのを選ぶ。いつか魔力が格段を上がり、チートキャラになることを信じて。

この頃ハープには会わない。一体どこで何をしているのだろうか。少しだけ、いやかなり気になります。尋常じゃないです。

「お、このクエストならちょっと難易度も上がっていいかもしれないな」

俺がそう言って受注したクエストは、『ゴブリン撲滅運動』だ。

くクエスト説明く

最近、森林に大量のゴブリン達が現れて、森の木を無差別になぎ倒しているようだ。

このままではせっかくの森林の大切な樹木がなくなってしまうかもしれない。

だからできるだけ多くのゴブリンを倒してくれ。報酬は多く支払う。

・基本報酬 ゴブリン一体×1000メイル

・産物報酬 ゴブリンの毛皮一枚×800メイル

・物品報酬 薬草×10個

あ、ちなみに物品報酬というのは、クエストを完了した後に依頼主からもらえる物品のことで、

アイテム、素材、装備品、魔術書（魔術を習得するのに必要な本）などなどがもらえる。

「よし、そうと決まれば罫の準備だ」俺はギルドを後にし、雑貨屋へと向かっていく。

言うまでもないが、魔術が強くない限り俺はせこい手しか使うつもりはない。

しかし、今回のクエストはちょっと厄介な点がある。

ブルースライムの産物は内臓にあるためボコボコにしても構わないが、

このゴブリンの産物は毛皮だ。そう簡単に傷つけると引き取ってもらえないだろう。

「今回は・・・とりあえずピアノ線が欲しいところだな。」

俺は雑貨屋でピアノ線（50mにつき700メートル）と、電熱線（50mにつき700メートル）をそれぞれ50m買う。これで準備は整った。

「早速出発だ！」俺は張り切って森林へと向かった。

森林は確かに以前よりも木が減っていた。環境破壊はよくない、と俺は思った。

早速森林の奥へと足を踏み入れると同時に、電熱線を手袋の上から右手に巻きつけ始めた。

あ、ちなみにこの手袋は、この前一緒にハーブとクエストにいった時に、プレゼントしてもらった。どうやらお揃いらしい。

まあそんな余談はおいといて、俺は二重に履いた手袋の上に電熱線を巻きつけておいた。

そしてそれが完了すると、ピアノ線を2本の高い木の一番高いところの間に45m程、蜘蛛の巣のように巻きつける。その木はもうかなりボロボロで、簡単に折れるが重量感があるという性質があった。

そしてピアノ線の残りの5mくらいを他の一本の木に巻きつける。その木の根元を掘り起こしておいて、少し蹴る程度で倒れるようにしておいた。

これで全自動カッター機の完成というわけだ。

ゴブリン達が俺を追ってきてその蜘蛛の巣トラップの場所へとやってくる。

その瞬間、俺は木を思いっきり蹴る。

蹴られた木は倒れ、その木の重みで2本の木は衝撃に耐えられず折れる、はずだ。

すると、奴らの頭上に折れた木とそこに巻きつけられていたピアノ線が落下してくる。

重量感満載な木のおかげで、落下スピードはとても速くなり、一瞬で奴らの頭をぐちょぐちょに・・・おっとこれ以上は想像にお任せしよう。

そんな恐怖の拷問器具のような罠が今完成した。

誤って自分がその罠に引っかけると間違はなく、即死↓異世界生活終了であろう。

俺は絶対にミスをしないと誓い、ゴブリン達をおびき寄せにさらに深部へと向かった。

どうやらゴブリン達は集落を形成して生活しているらしい。

だったらゴブリン達をかなりお怒りにさせる手段は一つ・・・

「炎の精霊よ、私の体にその力を示せ！ファイアボール！」

俺がそう言い放ったと同時に、左手に炎の球が形成される。

その球を、俺は一番大きな家へと飛ばした。

そう、今俺がしていることは放火だ。

住み心地よい住まいが無くなってしまうどんな動物でも悲しいであろう。

その原因を作ったのが俺なのだから、絶対に俺を殺そうと追ってくるはずだ。

俺はそれを狙っていた。そして、ぞくぞくとゴブリン達が家から急

いででてくる。

俺は魔術を使い、放火を続けた。どうやらゴブリン達は俺が放火していることに気付いたらしい。

「ゴブゴブブ！」ゴブリン達は一斉に俺の方へと走ってきた。ざっと20体くらいであろうか。なかなか上出来じゃないか。

俺は罠の方へと走り出した。ゴブリン達はなかなか足が速い。じわりじわりと、俺とゴブリンの距離は近くなっていった。

「うおおおおお！」俺はなんとか罠のところまで逃げ切った。

走ってきた勢いを利用しつつ、罠を始動させるための木を蹴った。

木に俺の脚が当たったと同時に、木はゆっくりと倒れ始めた。そして、その木の重みで、2本の木が折れる。そして蜘蛛の巣のようになったピアノ線が落ちてくる。

「ゴブ？」ゴブリン達は上を見上げた。そして罠に気付いたらしく、逃げようとしている。

しかし、ちょっと気付くのが遅かった。

ゴブリンの頭上にピアノ線が落ち、ゴブリンの大半はピアノ線により体を切り裂かれ、

口では表現できないようになってしまった。（自主規制により、リアルには表現いたしません）

しかし、3体程のゴブリンは罠を回避したらしく、ピンピンしている。

しかし、俺だってこの異世界で生き抜くためならどんな手段も選ばない。

67

第7話 討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』 ～前編～ (後書き)

今回は主人公の作る罠を考えるのが大変でした。

感想・評価お待ちしております！

あと、主人公の仕掛ける罠でいい案があったらアドバイスください！

第8話 討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』（後編）（前書き）

今回は後半戦です。

畏は多少適当な気もしますが、勘弁を・・・

そして、今からじわりじわりとこいつらを苦しめていくんだよ。

電熱線を巻きつけられたゴブリン達は身動きが取れなくなった。そこで俺は魔術を発動する。

「雷の精霊よ、私の体にその力を示せ！イナズマアロー！」

俺の右腕に雷がまとい始める。ちなみに魔力が上がって、今では乾電池3本分まで進化した。

その雷は矢を形成するのではなく、電熱線へと流れていった。

電熱線は電気が通ると、熱を帯びる。いくら乾電池3つ分でもそこそこの温度にはなるであろう。

しかし、電熱線を巻きつけている俺の手もやけどしてしまう。

そこで俺はハーブから貰った手袋を二重にして装着したのだ。これならやけどは避けられる。

手袋をしていても、電熱線が熱くなっていくのを感じた。

それと同時に、「ゴブゴブ！」というゴブリン達の悲鳴が聞こえ出す。

手袋をしてても熱が伝わってくるんだ。奴らは相当熱いであろう。

ちなみに俺が電熱線を選んだのには理由がある。

それは、ゴブリンの毛皮をあまり痛めたくないからだ。

第一の罨では体が引き裂かれるだけで、毛皮としての価値を十分に残すことができる。

そして電熱線は、炎の魔術と違って毛皮を焦がしてしまう可能性はかなり少ない。

多少傷はつくかもしれないが、価値はそこまで下がらないで済むだろう。

そうこうしているうちに、ゴブリン達は気絶してしまった。これでクエスト終了だ。

俺が今回倒したゴブリンの数は30体。

今回は綺麗に倒せたということで、全ゴブリンから産物である毛皮を剥ぎ取れた。

そして俺は産物を抱え、ギルドへと帰っていった。

「これが今回の報酬です。」そう言われ、俺が渡された茶封筒の中には、

基本報酬 ゴブリン×30体⇨3万メイル

産物報酬 ゴブリンの毛皮×30枚⇨2万4000メイル

計 5万4000メイルが入っていた。かなりの高額であろう。

さらにそれと別に家に物品報酬である薬草が届くらしい。

俺は報酬額を見て飛び跳ねていると、ハーブが現れた。

「ああ！ヒヨユキ！何そんなに喜んでるのー？」

「おお、さっきゴブリンのクエストに行ってきたてね。

それで今回の報酬があまりにも高かったもんで喜んでいたのさ。」俺はお金を見せた。

「わあー！すごいお金だぁ！……こうなったら明日はデートに行こうね」

でたぞ……ハーブの人を困らせる発言。このせいで俺は殺されか

けたのである。

そして今も周りから冷たい視線を浴びる。めっちゃめっちゃ背中が痛い。

「……」俺は無言であった。そこにハーブの追い討ちが来る。

「……ダメ？」ハーブは必殺技の上目遣いを繰り返してきた。これには俺も逆らえない。

「わかったよ！ いけばいいんだろ！ いけば！」俺はもうやけくそになっていた。

「やったあ！じゃあ明日10時にギルド前集合ね！」そう言ってハーブはでてってしまった。

「はぁ……俺の給料がぁ……」俺は自分の発言に後悔した。そこに殺気が近づいてくるのを感じた。

「おい、ちょっといいか……？」それは、ギルド中の男達であった。

また俺はこの男達に恨まれて、精神も肉体もボロボロにされてしま
うのか……

「い、いやだぁぁぁぁぁ！」ギルド中に俺の悲鳴が響いた。

————目線…ハーブ————

今日は久しぶりにヒロユキとあった。

最近クエストが忙しくてずっと会えなくて寂しかったんだよ。

だから明日は精一杯楽しみたいな！クエスト以外での初デートだも
ん！

・・・って私、まだヒロユキと付き合っていないのに・・・

明日には思いを伝えられるといいな！ってか明日、絶対に思いを
伝えるんだから！

——目線…魔術師ロウ——

どうやらヒロユキ君の事を好きになってくれた人ができたようです
ね。

彼はこの世界にきて新しい人生を歩み、生きることの素晴らしさを
感じてくれたでしょうか？

感じてくれると私も転生した甲斐があります。

まあ、まだまだ異世界生活も始まったばかり。これから頑張って
もらいますよ。

明日のデートの様子、楽しみにさせてもらいますね。

◆◆◆◆◆

残高… 3万4400メイル

収入… 5万4000メイル

支出… 4400メイル

合計… 8万4000メイル

◆◆◆◆◆

第8話 討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』(後編)(後書き)

次はデートの話です。

なにかリクエストあったら気軽に言ってください！

◆転生前の世界での出来事【出勤】◆（前書き）

幕間てきなものにしようと思ったので
こっち側にもってきました！

本編とは関係ないですが、見ていただけるとありがたいです。

◆転生前の世界での出来事【出勤】◆

俺の初出勤。俺は過去ずっとALL1なダメ人間で、社会に受け入れられるとは思っていなかった。

そんな俺にもとうとう仕事が決まったのだ！――――

「行ってきましたー」俺は朝食を食べずに、いや、正確には食べるものが無かったので食わずに、もちろん一人暮らしだから当然さっきの「行ってきましたー」の返事は返ってこない。

俺は勉強面だけでなく、運動面、人間性その他もろもろがありえないほど残念なのだ。

当然彼女もいるわけなく、さびしい生活を送っている。

「よし、会社で新しい出会いをするぞー！」俺は無駄な妄想をしながら会社へと向かった。

この時、俺は会社が超ハードブラックなことを知ること無かった。

「ここが例の会社だな。よし、きちっと挨拶をせねば」俺は服装をビチッと決め、

会社の中へと堂々と入っていった。

「今日からここで働かせていただくことになりました！斉藤広幸です！」

一生懸命働きますのでこれから宜しくお願いします！」

入るなり頭を深く下げる。これで掴みはバッチリなはずだ。

・・・あれ？何も反応ないぞ？

俺はそう思いながらゆっくりと頭を上げた。

するとそこには、俺以外にふとった社長らしき人間と、従業員1人しかいなかった。

「ノオオオオウ！！」俺は今まで描いていた妄想をぶち壊されたため、発狂した。

「ああ、君が新人ね。早速仕事にとりかかってもらおうから。ここに座って」

社長らしきデブが言う。そいつが指差したのはみかん箱だった。

「あ、あの・・・これ冗談ですよね？」

「いやいや、真剣だよ。ほら、早く座って！コレ今日中に仕上げてね」

俺が半ば強引に座らせられると、みかん箱の上に俺の身長並の高さの山積みになされた紙が乗せられた。これを今日中に仕上げろというらしい。

「ちょっと・・・正気ですか？みかん箱潰れちゃってますけど・・・」

「いやいや、真剣だってば。じゃあ宜しく」
そう言っ社長は自分の席（みかん箱2つというちょっとグレードの上がつてるやつ）に戻った。

「はぁ・・・やっぱりこんなところだったのか・・・」俺はしょうがなく仕事にとりかかる。

これからこの紙と永遠に戦いを繰り広げていくのかと思うと、俺は泣きたくなった。

——16時間後——

「っふー……やっと終わったし……」俺はやっとの思いで仕事を終えた。

気付けば、従業員らしい1名はもう仕事を終え、帰ってしまったらしい。

やはり仕事に慣れると手際もよくなるようだ。

「よし、よく頑張ったな。今日は帰っていいぞ」デブは言った。

「はい……さようなら……」俺は人生に絶望しつつも、家へと帰っていった。

それから俺の死闘が始まった。

毎日山積みにはされる書類を仕上げる。これで16時間はかかる。

もちろん、休憩なんてものは無い。そんなことをしている時間をもつたいない。

そして……ついに給料が手に入った。

「今月はよく頑張ったね。これが給料だよ」俺はデブから茶封筒をもらった。

「よっしゃあああああ！これで俺も大金持ちだ！」

俺はいままでの辛さが一気に吹き飛ぶような気がした。

俺は恐る恐る中身を見る。

そこにでてきたのは……

「2500円って……なんじゃこりゃあああ!!」

俺が仕事恐怖症になった瞬間であった。――――

◆転生前の世界での出来事【出勤】◆（後書き）

他にもリクエストあったらお願いします！

◆転生前の世界での出来事【パン屋と俺】◆（前書き）

こいつも場所変えです。

面白くは無いですが見ていただけるとありがたいです。

◆転生前の世界での出来事【パン屋と俺】◆

異世界に転生される前の俺には魔術を使えるような能力は無く、言えただけのダメ人間だった。

そんな俺は現在、ハードブラック会社で得体の知れない書類を仕上げる。

こんなもの一体何に使うのだろうか、とつくづく思っているが社長は答えてくれない。

そんな俺にも昨日給料が入ったのだ！・・・高校生のおこづかいより少ないが・・・

「やっぱり毎日食事はしたいよな。でも一ヶ月をこの金でしのぐのは・・・」

俺は半分あきらめていた。しかし転職するあても無く、もしも今の会社を辞めたら俺の給料が高校生のおこづかいから0までという大きな変化をとげてしまう。

「とりあえず、何に金を使うかを色々まとめてみようか」

俺は一ヶ月をこの極端に少ない収入で生活する方法をまとめてみた。

（一ヶ月で必要な物資を買う場合）

◆水道代

本来ならちゃんと水を使いたいところだ。しかし、こんなことにお金を使っている余裕は無い。

「公園の水を使えば問題ないよね」俺はまず一つの壁を乗り越えた。水道は使わなくても生活していけるだろう。

◆ガス代

これも生活の上ではまず欠かせない存在だろう。しかし、俺には金の余裕が無い。

「ガスは必要ないな。ガス使うもの買わなければいいんだし」また俺は壁を乗り越えた。

しかし、これで大幅に食事の選択肢が減ってしまった。セロリとかしか買えないだろう。

◆電気代

これはマジ必要。コレが無いならもう生活じゃねえええ!! って感じなものだ。

しかし、今の俺に電気代なんてものは払えない。

「いらないよなー。だって仕事から家に帰ってきたらもう寝るしあ、あとレンジとかも使わなければいいんだよな」

電気代を0円にすることにより、加熱という選択肢は無くなった。更に冷蔵庫も使えないので、食材の保存もできなくなってしまった。

◆食費

これだけは乗り越えられない壁である。俺が人間である限り避けて通れないものだ。

「よし・・・これに全額を注ぐしかないよな」俺は確信した。

しかし今までの節約により、加熱、長期保存という選択肢が消えた。

「もう俺にはセロリと共に生活するしか選択肢はないのか・・・」

俺があきらめかけた時、一筋の光が見えた。

「パ、パ、パ、パンの耳ならもらえる!!」

そう、パン屋では大概はパンの耳を捨てたり、お客様にあげるものだ。

つまり、そのパンの耳を貰う事ができたら食費は0になるかもしれないのだ。

しかし、この作戦には難関がある。

それは、パン屋のパンの耳を与える条件だ。

一番嬉しいのは、パンの耳をただで好きなだけ持ってっていいと言ってくれる店だ。

これならその店に暫くは寄生できる。

二番目は、一つだけだぞ、って言うてくれる店だ。

この店のパターンなら一日分は確保できるであろう。

しかし、次から貰える見込みは無い。だから一度きりと考えるのが無難だろう。

そして最悪のケースは、「あーすいません、パンの耳はパンをお買い上げの方に1個差し上げるっていうシステムになっているんですよ」だ。

これがきたら、「やっぱいいです」っていうことが精神的にできなくなってしまう。

つまり、強制的にパンを買わないといけないフラグが立ってしまうんだ。

「とりあえず大まかな作戦は立てられたな。明日から実行だ!」
俺はとりあえず寝ることにした。

———次の日———

「今日は決戦の舞台だ！」俺は公園でトイレ・水分補給を済まし、決戦の舞台へと舞い降りた。

「いらっしやいませ。」無愛想な男の店員が言う。これはかなりの難関かもしれない。

しかし、後には引けない。まずは店員を気をよくさせることからだ。

「あなたのつくったパンってありますか？」

「・・・メロンパンです」無愛想に言う。

「あーこれ凄くおいしそうですね！この焼き加減、表面のこげ具合、香り・・・

全てが完璧ですよ！」

「やっぱりそう思いますか！」先程までの無愛想な店員がまるで別人かのように変わった。

それから、俺は店員と1時間以上メロンパンについて話をした。ここらへんで交渉してみてもいいんじゃないのか、と思い俺は話をきりだす。

「ちょっとお願いがあるんですけど・・・」

「なんですか？」彼は目を輝かせている。これはチャンスだ。

「パンの耳を分けていただけませんか？」

「・・・・・・・・・・」

「あ、あの……」

「帰れ!!!」

「ひいひい！すいませんでした！」俺は急いで外へでようとする。
その時、店員が俺の腕を掴んでそつと袋を渡した。

「何も言わずに立ち去れ」

その中には、大量のメロンパンが入っていた。

「あ、ありがとうございます!!!」

こうして俺の収穫祭は幕を閉じたのである。

P,
S

俺、メロンパン好きじゃないんだよね・・

◆転生前の世界での出来事【パン屋と俺】◆（後書き）

感想・評価お待ちしております！

第9話 「俺、人生初の恋愛体験」 (前書き)

今回はハーブがヒロユキに告白しちゃう話です。
結ばれるべきか・・・結ばれないべきか・・・
まだ結末考えてません！

第9話 「俺、人生初の恋愛体験」

——目線…広幸——

俺は昨日、荒稼ぎをした。それをハーブに自慢したら、デートに行くはめになってしまった。

「せっかくの金があ・・・」俺は今日の朝食は贅沢しないで、この前の報酬でもらった薬草を食べていた。（あ、ドレッシングとか無いからめっちゃ苦いよ）

そして俺は約束通り、重い足を動かし、ギルドへと向かった。

「もうー遅いー！」ハーブは約束時間まであと10分もあるのにギルドに来ていた。

もちろん、俺は周囲から冷たい視線を浴び続けている。

「は、早くいこうぜ・・・ここはダメだ！」そう言って俺はハーブの腕を掴んでギルドを後にした。

ちなみに俺達が今向かっているのは、『ガルダス』という街だ。

その街はなんと言っても魔術書が大量に発行されている場所であり、初心者魔術から精霊などの扱う大技魔術、補助魔術・回復魔術など幅広いジャンルの魔術書が雑貨屋に置いてあるのだ。今日お金に余裕があったら買うことにしよう。

・・・まあ、余裕があるとは思えないんだが・・・

さっきはらハーブは雑貨屋にある、ブレスレットばかり見ている。

ちなみに額は、3万メイル前後である。ありえないほど高い。

しかし、これだけ高いのには理由がある。

この店にあるブレスレットは、全て『魔法石』から形成されているのだ。

ちなみに図鑑によると、魔法石というのは魔物の体で偶然できる石で、

石には魔力が込められており、装備している者の魔力を増大させることができるらしい。

あと、強い魔物であればあるほど魔法石に込められている魔力が大きくなるのだ。

もちろんその魔法石の方が値段が高いのだが・・・

「ヒロユキーこのブレスレットが欲しいんだけどおー」

ハーブが指差したのは赤い魔法石でできたブレスレット。イグリユスの魔法石らしい。

値段は・・・4万メイル。二つ買うと7万メイルらしい。

「無理だ。そんなに俺も払えないわ!」俺はこればかりはキツパリと断る。

「・・・ダメ?」またもやハーブの上目遣い。俺の心は一瞬揺らいたが、決意は変わらなかった。

「ダメだ!」俺はもう一度断った。

「ええーお願いー」ハーブは俺に抱きついてきて言った。

その時に二つの柔らかいものが俺の肌当たる。その瞬間俺の心は折れた。

「・・・しょうがないな。今回だけだぞ」・・・とうとう言ってしまった。

「やったあー！じゃあ二つお願いします」そうハープは言って、店員にブレスレットを渡した。

「ちょー！一つでいいだろ！」

「ダメだよ！こっちの方がお得だし！それに・・・」

「それに？」俺は聞き返す。

「やっぱり・・・お揃いの方がいいもん！」ハープは頬を赤くして言った。

その瞬間、俺の興奮ゲージがMAXへ到達し、危うく失神しそうになった。

しかし、会計をすると同時に俺の興奮ゲージが0にまで落ちた。

「お会計、7万メールになります」

「・・・」俺は無言で大金を支払う。このお金を渡す時間がとてつもなく辛い。

俺は金を支払い終えた後、雑貨屋を急いであとにした。

もしこれ以上雑貨屋の中にいて、またハープが欲しい物を見つけたらおしまいだからな。

「やったあー！ヒロユキとお揃いだあー！」ハープはブレスレット

を腕につけていった。

もちろん俺も強制的にブレスレットをつけることになる。

まあこれをつけることによって魔力が上がるから悪くは無いよね。

そんなこんなで俺は全財産の90%ちかくを失った。

しかし、その後もデートという名の金の無駄遣いは続いた。

遊園地の中へ行き、クレープを食べたり、観覧車に乗ったりなどなど・・・

結局夕方になった頃には、俺の全財産が4000マイルにまで減っていた。

「ヒロユキー今日はありがと！」ハーブはにっこり笑って言った。その笑顔を見た瞬間、8万マイルの支出が屁でもないように思えてしまった。

「俺も楽しかったよ。また今度行こうな。」もちろん、社交辞令だ。

「うん！・・・ヒロユキ、私言いたいことがあるの！」

「ん？なんだ？」

「あ、あの・・・そ、それは・・・」ハーブの顔がだんだん真っ赤になっていく。

「どうした？熱でもあるのか？」やはり俺は恋愛経験0だ。後から考えてみると、自分でも有り得ないほど鈍感だな、って笑えてくる。

しかし、まだ俺はハーブの言おうとしていることがわかっていなかった。なので、こんな簡単なことにも気付けなかった。

「ヒロユキは、ハーブのことどう思う？」ハーブは目をそらしながら言ってきた。

「普通に、好きかな」この時、俺はハーブのことを友達として好きと言ったんだ。

しかし、ハーブはそれを別の意味でとらえたらしい。

「ハーブをヒロユキのことがすき！だから付き合ってください！」

「・・・え？」俺は聞き返した。

「いや、付き合ってほしいって言うだけだよ」ハーブの顔はまだ真っ赤だ。

「・・・ちょ、ちょいちょいちょい・・・え？罰ゲームかなんか？」

俺は思わず疑った。それもそのはずであろう。

俺はルックスは中の下、頭はとてつもないバカ、運動音痴、恋愛経験0で、

自分のためなら手段を選ばないダメ人間の代表だぞ。それがこんな美少女を付き合える筈がない。

「ハーブはいつでも本気だよ！ヒロユキは確かにブサイクだし、バカだし、鈍感だし、運動音痴だし、恋愛に対してかなりのチキンだし・・・でも・・・」

頼む・・・もうやめてくれ！俺のガラスのハートがもうボロボロだ！

「でも・・・すっごくやさしい人だと思う！だって7万マイルもするプレゼントを普通の人なら買わないよ？それにヒロユキは貴族なわ

けどでもない、でもハーブのために買ってくれるなんて凄く嬉しかった。
だからハーブはヒロユキのことが好きになったんだ・・・どうかな？」

「わかった・・・気持ち嬉しいよ。でも、もう少し考えさせてくれないかな・・・」

俺は恋愛経験0だもん。本当にハーブを幸せにできるか・・・」

「・・・わかった！じゃあ明日聞かせて！」ハーブはそう言って走って帰ってしまった。

そりゃ恥ずかしかっただろうな。帰っちゃうのも当然だ。

「俺は・・・」俺は歩きながら考えていた。

自分みたいなダメ人間にハーブを幸せにすることができるのか？
自分みたいなダメ人間がハーブと付き合ってもいいのか？

俺は、自分がダメ人間に生まれてきてしまったことに後悔した。

もしも、ダメ人間じゃなかったら答えなんて迷わない。

もしも、ダメ人間じゃなかったらハーブを苦しませることはない。

もしも、ダメ人間じゃなかったらこんなにも自分に落胆することもない・・・

「やっぱり俺は・・・」気付くと俺の家の前だった。

そして、俺は決断をした。明日ハーブに本心を明かす。そう決めた。

————目線…ハーブ————

本当に告白しちゃった・・・やっぱり恥ずかしかったな。

きっとヒロユキはいきなりで驚いてると思う。そして、もの凄く悩んでいるんだと思う。

本当は言いたかったんだ。ヒロユキはダメ人間なんかじゃないって。ハーブがゴブリンの群れに襲われた時も、弱いくせに助けにきてくれた。

今日だって、ハーブを楽しませようと一生懸命だった。

やっぱり、ヒロユキはすごく優しいよ。そんなヒロユキが一番好きなんだ。

・・・だから、明日はちゃんと返事してよね・・・

◆◆◆◆◆

残高.. 8万4000メール

収入.. 0メール

支出.. 8万メール

合計.. 4000メール

◆◆◆◆◆

第9話 「俺、人生初の恋愛体験」 (後書き)

書いててハーブがかわいいと感じてしまった・・・
感想・評価お待ちしています！

第10話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』くその1く（前書き）

今回は大型の魔物討伐の話です。

いい罫考えようとしたんだけど残金があれだったんでパスします！

第10話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』〈その1〉

——目線；広幸——

俺は今日、ハーブに自分の思いを伝えるつもりだ。

それがどんな結果になろうが、後悔はしない。それが俺の決めた道なのだから。

そして俺にはもう一つの重大なことがあった。

どうやら俺のクエストの成績がなかなかいいらしく、上級魔物の討伐クエストを受けれる権利が与えられたのだ。

かと言ってもまだまだ俺はギルドの新米だ。ペスカの受けているような恐ろしい魔物は討伐しない。

今回は、ギルドに入団したら絶対に超えなくてはならない壁である

『炎翼龍』を討伐するのだ。

※ちなみに『炎翼龍』というのは、イグリュスの別名です。

このクエストをクリアすることにより、俺のギルドレベルが上がるらしい。

ちなみに今俺は1だ。1というのはゴブリン達を討伐する程度のクエストしか受けられない。

当然稼ぎも少なくなってしまうんだよ！！ちくしょおおおおおおお！！

・・・ちょっと取り乱してしまった。しかし、このクエストをクリアすれば俺も2にあがれる。

そして今まで以上に収入も上がるというわけだ。これはおいしい話だね、うん。

あ、あとこのクエストには条件がついているらしい。

どうやら連れて行けるのは同じレベル以下の奴だけらしい。だから俺が連れて行けるのは……

ハーブくらいであろう。もし二人でクエストクリアしたら、ハーブもレベルが2に上がれるらしい。

都合良く、ハーブはギルドにいた。

俺と一緒にクエストやらないか？（いさじ風）と言ってみた。

「やったー！私もちょうど受けたかったんだけど……一人じゃ難しそうだったからできなかったの。」

でもヒロユキと一緒にならうれしいな！……あ、あと昨日の返事を教えてね」

「ああ、分かってるって。このクエストが終わったら俺の思いを言うから。」

俺は言い切った。しかし、この言い方では死亡フラグが必然的に立ってしまうのだ。

そんなものへし折ってやるううう！！……すまん、また取り乱した。

「じゃあクエスト行こうか。ちょっと準備してくるから待ってて」

俺はハーブにそう言って雑貨屋へと向かった。

————目線…ハーブ————

今日は楽しみだな！ヒロユキとまたクエストに行けるなんて……

でも、一番楽しみなのはヒロユキの返事だよ。

ちよっとドキドキしてる。でも、ヒロユキがごめんなさいしてもあきらめないんだから。

「あー早く帰ってこないかなー」私はそうつぶやきながらヒロユキの帰りを待っていた。

―――目線…ヒロユキ―――

雑貨屋についた。しかし今の俺には軍資金がかなり少ない。とりあえず簡易罠にしようか。

「まずは・・・これとこれと・・・あ、あとこれが必要だな。」

俺は、瞬間接着剤（250メートル×4）と錆びた鉄の剣（1000メートル×2）を買った。

それと、・・・・・・を買った。これはまだ明らかにはしないでおう。

ちなみに俺が鉄の剣を買った理由は、昔は友達と格闘したこともあって、

友達はなかなかお金持ちで、メリケンサック、プラスチック製のバットなどなど・・・

かなり高性能な武器を手に使っていたんだが、俺にはそれを買う金もない。

その時に教室の二つのほうきを使って戦っていたんだが、その武器を手にした瞬間、

日頃運動音痴である俺がなぜかなり俊敏になり、一番強くなってしまっていたのだ。

「けっこう重いけど、なんとかなるよな」俺は二つの剣を腰に下げ、再びギルドへと戻っていった。

俺がギルドに戻ると、ハーブは駆け寄ってきた。

「おかえりー罨は作れそう？」

「罨っていうほどのもんじゃないけどな・・・じゃあ行くか」俺達はギルドをあとにした。

「ふうー到着」俺達は森林へと辿りついた。

早速イグリュスを探し始める。イグリュスは森林の奥の方にいる、とペスカは言っていた。

「じゃあ奥へと入っていくか」俺はハーブと共に森林の奥へと進んでいった。

すると目の前にゴブリンが現れた。ニヤニヤしていて気持ち悪い。

「ここは任せて！」ハーブは背中にかけている太刀を取り出していた。

しかし、その時には俺は動き出していた。

「ふうん！」俺は一瞬でゴブリンの懐へと接近し、腰にかけている剣を抜いて斬りつけた。

「ゴブー！」ゴブリンを一撃で倒すことができた。・・・腕は落ちてないようだな。

「え？ヒロユキにも特技ってあるの？」

「失礼な！俺にだってできることは何個もあるさ！例えば、二つの剣を使いこなすこととか……」

あとは……ゴメン、やっぱ無いわ」俺は少しでも自分を誇ったことが恥ずかしかった。

「だよね。でもめっちゃめっちゃ強いじゃん！もう雑魚魔術なんて使わなくていいんじゃない？」

「そうだな。今度からは剣士で……（プルルルル）」俺が職業を変えようとしたときに、電話がかかってきた。

「魔術師からの転職は絶対許しませんよ。もしやったらあなたの身分を奴隷に変えてしまいますね」

それは、あのクソ魔術師からの脅迫であった。

「わかったよ！魔術師（たまに剣士）でやっていくよ！」

「それもダメです。」

「いいじゃん！EXILEでもボーカル兼パフォーマーの人いるじゃん！」

※パフォーマーはダンスする人のことです。

「む……しょうがないですね。許しましょう」

「そりゃどうも。じゃ」俺は電話をきった。

- それにしても魔術師さん・・・どこから俺を見ているんですかね・・・

第10話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』くその1く（後書き）

残念ながらまだ戦いはしないのです・・・
広幸にも特技があったとは・・・作者もビックリ！

第11話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』くその2く（前書き）

イグリュース討伐の続きです。

眠くて集中力が切れてきました。

第11話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』〈その2〉

——目線…広幸——

俺は魔術師ロウとの電話を終え、イグリュスの搜索を再開した。

先程から太陽の陽射しが強く、かなり暑くて汗が滝のように流れる。しかも周りは樹木に覆われていて熱が逃げづらく、めちゃめちゃむし暑い。

「ねーどこにいるんだろう？」ハーブはどうやら飽きてきたようだ。

「うーん・・・きつとどこか日陰で休んでいると思うよ」

「なんで？」ハーブは俺に聞いてきた。

「だって今日は炎天下だぞ。もし日向にいたとしたら太陽の熱であいつの翼に引火したら大変だろ。」

しかも食事以外で無駄な体力を使うなんて思えないからな。」

「あくなるほどね。じゃあ奇襲をかければいいね！」

「そうだな。でも見つけない限りには・・・」

俺が言葉を言い終わる前に、イグリュスを見つけてしまった。

大きな木の下の日陰で寝ているイグリュスは森の王者とは思えなかった。

そう、なにが一番残念だったかと言うと、寝顔だ。

いつもは王者の風格あるりりしい顔だったが、寝顔はどこかの中年

のおっさんのようだった。

いびきはうるさく、顔は「マジかよ？」ってぐらい滑稽で、笑いをこらえるのが精一杯だった。

（ねえねえ、あれって本当にイグリュスなの？）

（うーん、ブサイクだけどそうだな。とりあえず奇襲だ。ハーブ、あいつの首を斬って来てくれないか？）

わかった。やってみる）そうハーブは言って、ひっそりとイグリュスの首元へと近づいていった。

ハーブは首の前に立つと、背中にかけていた太刀と鞘を腰へと移動させた。

そう、今からハーブは居合い斬りをやるのだ。

居合い斬りは呼吸を整え集中力を高めて一撃に全力を注ぎ込む構えである。

もちろん、より強烈な一撃を繰り出すためにはかなりの集中力を必要とする。

更に相手に大ダメージを与えるなら、より高度な太刀さばきも必要となるであろう。

「よく考えたら、初めてハーブの戦闘姿を見るかもしれないな」

そしてハーブは目を閉じながら、呼吸を整え始めた。だんだん息の音が聞こえなくなってくる。

スパッ・・・

俺が気付いたときにはハーブはもう刀を抜いており、イグリュスの

首を斬っていた。

ハーブの一太刀はイグリュスの首をかなり深く斬っており、血が大量に吹き出している。

「グゲエエエ！！」イグリュスは痛みに絶叫しながらも立ち上がった。

さっきまでの滑稽な顔が嘘のように思えるほど、勇ましく威厳のある顔立ちへと変わった。

そしてイグリュスは自分の羽を首にくつつけた。・・・かなり器用なんだな。
さらに高速回転をし始める。すると、首についている羽が燃え始めた。

一見自殺行為をしているようにも見える。しかしこれは賢明な判断だ、と俺は思った。

（豆知識）

出血している時の応急処置として、傷口を火で焼くと出血が止まるのだ。

皆さんは聞いたことは無いだろうか。鼻血がよく出る人がたまに言うことがある。

「鼻を焼けば鼻血がでなくなるんだよ」と。

これは、鼻血をでなくさせるために鼻の中を火で焼くという処置らしい。

そんな俺の解説はさて置き、どうやらイグリュスの処置が終わったようだ。

イグリュスは空へと舞い上がり翼を大きく広げた。

「グエエエエエ！」イグリユスは羽を俺の方へ飛ばしてきた。

「ぐっ！！」俺は避けきれなかった炎をまとった羽が俺の体へと突き刺さる。

「ヒロユキ！」ハーブは走ってきた。

「……こいつは強敵だな……」俺は体に刺さっている燃えいている羽を抜きながら言った。
羽を抜くたびに激痛が走り、そこから血が流れ出す。とてつもなく痛い。

「なら手っ取り早く罠を仕掛け始めるしかなさそうだな……」俺は瞬間接着剤と●●●を取り出した。

それをハーブに持たせて作戦を説明をする。

「よし、ハーブ！どこか木に隠れるんだ！」

「分かった！」俺はハーブが木に隠れたのを見計らい、イグリユスを挑発した。

「おい！お前の寝顔ブサイクなんだよ！みてて吐き気がしてくる」

どうやら俺の挑発に気付いたらしく、かなりご立腹な様子。

「キエエエエエ！！」空中で高速回転を始めたと思うと、翼が燃え始めた。

そしてそのまま俺の方へと突っ込んできた。

「よし！」俺はイグリユスをひきつけたまま、ハーブの隠れた木のほうへと走っていった。

「準備できたよー！」ハーブは木の陰から顔をだして言った。

「いける！今ならいける！よし！ハーブ、移動しとけ！」俺はハーブの隠れていた木の目の前まできた。

「キエエエエ！！」イグリュスは猛スピードで追いかけてきていた。

俺はイグリュスに直撃するギリギリで横へと回避した。

イグリュスが木に直撃する。すると同時にイグリュスはきにへばりついて動けなくなった。

そう、イグリュスが激突した木には、大量の瞬間接着剤が塗られていたのだ。

ぶつかった瞬間に瞬間接着剤にイグリュスがくっついて、動けなくなるというわけだ。

そしてここで今回の秘密兵器を投入しますか・・・

ハーブは手にしていた●●●をイグリュスめがけてぶっかけた。その瞬間、ものすごい大爆発が起こった。

ハーブがぶっかけたものとはそう、ガソリンだったのだ。

奴の体からでている炎で引火し、大爆発が起きたというわけさ！
H A H A H A H A H A !

・・・すまない、あまりにも爆発が大きかったんで興奮してしまった。

爆発で巻き上がった煙が消える頃には、先程までいたはずのイグリュスが消えていた。

「え？まさか爆発で木っ端微塵になっちゃった？」

「違う！上！」ハーブが指を差した方には今までとは比べ物にならない程の炎を吹き出しているイグリュースがいた。

炎はいままで以上に澄んだ赤色をしており、全身を炎でまとった奴はこちらを睨みつけている。

「クエエエエエエ！！」

——その叫び声と共に、俺達と炎翼龍^{イグリュース}の最期の死闘が始まった。――

第11話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』くその2く（後書き）

まだひっばります。

次でこのクエストは終了になりますので宜しく願います！

第12話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』くその3く（前書き）

戦いはこれで終了です。

しかし、まだやることが残っているなのでその4を作ろうと思います。

第12話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』〈その3〉

俺達はイグリュスの動きを封じ、ガソリンという強力なアイテムを使って確実に奴の息の根を止めたと思っていた。

しかし、そんなものは幻想にすぎなかった。

奴は爆発で舞い上がった煙の中から再び颯爽さっそうと現れた。

奴の全身は煌びやかな炎がまとっており、顔立ちは先程の寝顔を忘れさせるような、怒りに満ち溢れた顔になっていた。果たして、戦いはどうなるのか!?・・・次話につづく――

「まだ終わらねえよ! てか始まって200文字くらいしかたつてないだろ!

おい作者! 適当に話数を増やそうとしても許さないからな!」

俺は天から聞こえるナレーション的なものにツツコミを入れた。

「さてと、もう罫は使っちゃったからな。どうやら剣で戦うしかないさそうだ」

俺は腰にかけている二つの剣を抜きだし、空にいるイグリュスのほうに構えた。

「ハーブ! 一気にしかけるぞ!」俺が言うと同時に、ハーブ太刀を構えた。

「うおおおおお!!」俺はイグリユスのほうへとジャンプする。
・・・肝心な事を忘れていた。

あくまで俺は剣の扱いが上手いだけであって、身体能力はダメなんだった。

当然、ジャンプはイグリユスに届くはずも無い。30cmくらいしか飛べなかった。

「うわー。ヒロユキかつこ悪いー」ハーブの冷ややかな視線が痛い。

「ぐっ!! 今のは見なかったことにしてくれ!!」

俺がハーブにお願いしていると、イグリユスは空からダイブしてきた。

「グエエエエ!!」大きく広げた翼に俺は直撃した。

「痛ッ! 熱ッ!」俺は一瞬で地面に叩きつけられてしまった。

・・・リアクションが薄いことにはかまわないでください。

「ヒロユキ!・・・よくも!」ハーブは怒りで顔を歪め、イグリユスの左翼を斬りつけた。

「グエエエエ!!」イグリユスは翼を斬られたことに激怒し、ハーブを吹っ飛ばした。

「ハーブ!」俺はなんとか立ち上がり、吹き飛ばされたハーブの方へと走っていく。

ハーブはどうやら気絶しているようだ。これでは戦えるのは俺だけであろう。

「やはり、俺のようなダメ人間では無理なのか・・・」俺はクエストを諦めようと考えた。

しかし、俺はハープに言われた言葉を思い出した。

（ヒロユキは確かにブサイクだし、バカだし、鈍感だし、運動音痴だし、恋愛に対してかなりのチキンだし・・・でも・・・すつごくやさしい人だと思う！）

「やさしい人・・・か」俺は腕につけているブレスレットを見てつぶやいた。

そして俺は決意した。

「おい、寝顔ブサイク！今俺はハープにプレゼントを無理矢理買わされて金欠なんだよ！

お前をぶっ潰して金を荒稼ぎしてやる！」俺は再び剣を構え、奴の懐へと潜り込む。

「ゲエエエ！！」奴は燃えさかる翼で俺に攻撃してきた。

「ふっ。双剣を手にした俺はダメ人間じゃないんだよおおおおお！」

俺は翼を華麗に交わし、奴の腹に剣を振りかざした。

「グワアアアア！！」イグリュスの腹から血が飛び散り、それをこらえながらも奴は空へと舞い上がった。

「・・・そういえばあと一つだけいい作戦があるかも知れないな」俺はあることを思い出し、ある場所へと走り出した。

そう、今俺が向かっている場所は、この前俺がゴブリンの討伐クエ

「グエエエエ!!」イグリユスも必死に抵抗する。

もちろん、俺の筋力ではイグリユスを引き上げることは不可能だった。

しかし、俺は違うことを狙っていた。

イグリユスが抵抗してくれたおかげで、ピアノ線が奴の体を切り刻む。

イグリユスはうめき声を上げている。だいぶ弱ってきているようだ。

「氷の精霊よ、我の体にその力を示せ!アイススパ!」

俺は右手に氷の棘を作り出す。今まではつらら程度の雑魚魔法だった。

しかし、魔法石を装備し、魔物を倒してきた俺の魔力は以前よりもはるかに上がっていた。

形成されたのはつらら程度のサイズだった。

しかし、それが10本くらい形成された。これも魔力が上がったからであろう。

「死ねえええ!!」俺はイグリユスめがけて投げつけた。

6本くらいは奴の炎で解けてしまった。しかし、残りの4本がハーブが斬りつけた傷口へと突き刺さる。

今まではスライムにも突き刺すことができなかったが、今回はイグリユスに刺さった。

「グギャアアア!!」つららが奴の傷口をえぐり、とうとう奴は力尽きた。

ドサツ、と地面にイグリユスが落ちる。そう、俺達は森の王者に勝利したのだ!

「やった！・・・（ドサッ）」
しかし、俺にも起きているほどの体力も無く、そのまま気絶してしまった。

——目線…魔術師ロウ——

「おお、どうやら炎翼龍に勝利したようですね。」

やはり彼は凄い実力を持っているようだ。

あれだけの貧弱魔法と劣化した武器で倒すとは・・・彼の實力も計り知れませんね。

「さてと、あのまま倒れたままは可哀想ですし・・・ちょっと転移魔法を使ってあげましょうか。」

私は指を噛み切り、地面に巨大な魔方陣を書き始めた。

「これでよしっ」と私が魔方陣を書き終わると同時に魔方陣は光を放つ。

そして、その魔方陣の中に広幸君と彼の彼女さん？と討伐したイグリュスが現れた。

「目を覚ましたらきつと驚きますねー楽しみです。」

彼達が目を覚めますまで、魔物討伐でもしてきましようか。

第12話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』くその3く（後書き）

主人公の魔力をもう少し上げたほうがいいのかな・・・
感想・指摘お待ちしております！

第13話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』くその4く（前書き）

今回は広幸の気持ちを伝える話です。

第13話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』くその4く

——目線…広幸——

俺は目を覚ました。すると、周りの景色が違うことに気付いた。

「あら、気付きましたか？」そこに立っていたのは魔術師であった。魔術師の横には顔が2つあり、犬のような顔立ちで、大きな翼を持ち、藍色の毛で体を覆っている赤い眼の獣が倒れていた。

「あのー、それ何？」

「ああ、これですか。これは『オルトロス』ですよ。」

く凶鑑データく

オルトロス 別名…弑顔獣 産物…弑顔獣のアギト

ギリシャ神話で語られている二つの顔を持つ犬です。

ギリシャ神話では落ち着きの無い性格として語られているが、こちらの世界のオルトロスは理性を持っている。しかし、かなり凶暴な魔物。

「まあギルドレベルが4くらい無いと戦うことは無いでしょう。しかしその分だけあって報酬はかなり高額ですよ。広幸君、あなたも受けてみてはどうです？」

「絶対嫌だよ！死んじゃうもん！」俺は断固拒否した。

「まあ拒むのはは無理も無いでしょう。それより体の傷は治りましたか？」

「ん？傷が治ってる・・・」俺はからだを見たが傷は無く、痛いところも無かった。

「ふふふ、ちょっと回復魔法を使いましたからね。」

「ありがとうございます！てかその魔法教えてくださいよ」俺はハーブから習得した上目遣いを使ってみた。

「なんですか気持ち悪い。」
効果0だった。なんかすごい恥ずかしいんだけど。

「まあ教えてあげてもいいでしょう。あなたはちょっと弱すぎますもんね。

ある程度の魔力はつけてあげようと思います。チートまでは行きませんけど」

「本当ですか!？」

「しかしあなたが修行について来れたらですけどね」

「なんでもやりますから!」俺にも唯一の希望が見えてきた。

「じゃあしばらくの間はこっちに滞在してもらいます。
今からあなたとイグリュスとそこで倒れているあなたの彼女さんを一度ギルドに転送させますから。
ハーブさんとも一旦お別れを告げて置いてください。」

「……わかりました」ハーブと一度離れなくてはいけないのか。俺はそう考えると切なくなってきた。あいつも嫌だって言うかもしれないな……

「じゃあ行きますよー」魔術師は指を噛み切り、自分の血で床に魔
方陣を書き始める。

「早く入ってください」そう言われたので、俺はハーブを担いで魔方陣の中に入った。

その後、魔術師ロウはイグリュスの周りにも魔方阵を書き始めた。

「それでは」魔術師が指をパチンと鳴らすと同時に、魔方阵が光りだす。

俺達は光の中に吸い込まれていった。



「やっと目を覚ましたか」

俺が目を覚ますと、ギルドマスターのフレアがいた。

「いきなりイグリスとハーブと共にギルドの玄関に現れてビビったぞ。」

「ああ、魔術師ロウさんに転送してもらったんですよ。」

「なるほどな。確かにあの上級転送魔法が使えるのはロウくらいだろうしな」

（そんなにあの魔術師は強かったのか・・・）

「それよりこれが今回の報酬だ。」俺はフレアから茶封筒を渡された。

基本報酬…3万メイル

産物報酬…炎翼龍の魔法石×2（4万メイル）

物品報酬…炎翼龍チケット×4

「すみません、この炎翼龍チケットってなんですか？」

「ああ、魔物を倒したときにもらえるチケットだ。

素材を渡すのは面倒なんだな。そのチケットを何枚か集めて鍛冶屋とかに行くと

武器を強化してもらえたり、金に換金してもらえたりするんだ。」

「なるほど、ありがとうございます。では」俺はギルドを後にしようとした。

「あー。ハーブがお前のことを外で待っていたぞ！」

「わかりました。行ってみます。」

そういえばまだ俺の気持ちを伝えて無かったよな。

俺は外に出た。そこにはハーブが待っていた。

「ヒロユキ！もう大丈夫なの？」

「ああ、傷はなんともないよ。ハーブは大丈夫？」

「うん！目が覚めたら治ってた！」

そっか。ハーブは魔術師のことを知らないもんな。

「そうだ。はい、これ報酬」俺は報酬の半分である3万5000メイルを渡した。

「こんなものよりもっと欲しいものがあるんだけど・・・」
ハーブは報酬を受けとりながらもモジモジしながら言った。

「ああ、そうだったな。俺の気持ちを言わないと・・・」

「どう？」ハーブは目をそらしながら言った。

「・・・ごめん。やっぱり俺にはハーブを幸せにすることは無理だよ。

気持ちは凄く嬉しかったけどハーブには俺なんかよりもっといい人がいると思う。

もしも俺がもっと強くていい人間になれた時には俺から告白するか・・・」

「・・・わかった。じゃあね！」

ハーブは俺に一度も目を合わせることが無く走って帰ってしまった。
なぜだろうか、ハーブの声は震えていた。

やっぱり俺みたいなお男が「付き合っ」てなんて言えない・・・
もし付き合っただとしても明日からはこの街から離れるなんてもっと
言えない・・・

「こっそりいなくなるのも悪いけど、しょうがないよな・・・」



第13話 討伐クエスト『炎翼龍の飛翔』くその4く（後書き）

これで第一章が終わります。

ちよつと短かったと思いますが

第二章が始まる予定です。

内容は、広幸が若干チート化するまでのお話です。

第14話 「俺、未開の地へ行く」 (前書き)

第二章 「ダメ人間チート化!？」の始まりです。
果たして広幸はチート化することができるのでしょうか？

第14話 「俺、未開の地へ行く」

——目線…広幸——

朝だ。俺は今日からこの街を離れなくてはならない。

ハーブにはちゃんと俺の気持ちを伝えたし、もう何も悔いは残っていない。

「さてと、長い修行になりそうだ。ちょっと準備をしていくか」
俺は鍛冶屋へと向かった。

「あいよ！いらっしやい！」

「あのー。この錆びた鉄剣を強化したいんだけど。」

「あいよ！じゃあチケットを渡してくれないかい！」

「はい。」俺は炎翼龍のチケットを2枚差し出した。

「なるほど・・・これなら『フレイムツインソード』くらいが作れるぞ！」

「ああ、任せた。」・・・剣なんてわかんねーよ。なんでもいいから早く作ってくれ！

「じゃあちよつと待っとけよな！」そう言って鍛冶屋のおじさんは奥の工房へ入っていった。

～2時間後～

「はいよ！完成だ！」おじさんはドヤ顔をしながら現れた。

おじさんが手にいていたのは、先程までの錆びついた剣とは思えない美しい剣であった。

剣は薄い赤色をしており、金属特有の光沢を放っていて、炎翼龍の名にふさわしかった。

「おお、これは随分と美しい剣になったな！」

「いやいや、あんちゃん！この剣を振ってみると凄さがもつとわかるよ！」

俺はおじさんに剣を渡された。ちょっと振ってみることにしよう。

ブン・・・

かなり軽量化されたようだ。これなら筋肉痛にもならずに済みそうだ。

しかし、それ以上に素晴らしかったのは剣の能力である。

振ったら剣の刃が炎をまとう。これも炎翼龍の素材を使ったからなのであろう。

「どうだい？かなりいい武器だろう？」おじさんはまだドヤ顔をしている。

なんだか凄く腹が立つが、本当に素晴らしい武器なので許しておこう。

「ああ、ありがとう。じゃ」俺は店を後にしようとした。

「ちょいちょいちょい！あんちゃん、金払ってないよ！」おじさんが止める。

「え？チケットだけじゃダメなの？」

「そうだよ！はい、じゃあ2万メイル払ってね！」

ぐ……最悪だ。結構な高額じゃないかあああああああああ
！！

「……後払いで」俺は猛ダッシュで店から逃走した。

「ちょいちょいちょいちょいちょい！！！」

おじさんは前に突き出た大きな腹をゆっさゆっさと揺らしながら俺を追いかけてくる。

しかし体型のわりにおじさんは早く、俺にどんどん追いついていく。

「なんであんなに早いんだ！？……しまった！」

俺は忘れていた。自分がポツチャリ系の中1と足の速さが変わらな
いことを……

「うぎゃあああああああ！！」俺は捕まってしまった。

「あんちゃん、なんで逃げたんだ？」

俺は拷問されていた。

「いや、ちょっとお金を払いたくなかったもので……ごめんなさ
い！」俺は土下座した。

「ふざけんな！そんなんで許してもらえと思ったか！」

「ちゃんとお金は払いますから……」俺はお金を取り出した。

「今回は3万メイルで許してやるからな！ありがたく思え！」

「・・・あの、お金1.5倍に増えてませんか？」

「づべこべ言うな！いいから払え！」

「ひいひいひい！」俺はおじさんの脅迫に心が折れ、3万メイルを支払った。

「よし！じゃあもう帰っていいぞ。俺は今から余計に貰った1万メイルでパチンコをしてくる！」

（心の声）

ふざけやがって！俺の貴重な1万メイルをなんだと思ってやがる！
中年太りの分際で！潰す！潰す！TU★BU★SU★！H A H A H
A H H A！！

しかし、こんなことが言えるわけも無く、俺は渋々鍛冶屋を後にした。

「さてと、武器も買ったわけだし・・・魔術師のところに行くか」
折れは魔術師に電話した。

「もしもしー。こちら魔術師ロウのハンバーガーショップ本店です。」

「なんでだよ！どんな副業してんだよ！」俺はいきなりの出来事に驚きながらも正確にツツコんだ。

「ああ、これはちょっと趣味でやってるだけですよ。」

「どんな趣味してんだよ！」

「それより、ちゃんとイメージキャラクターもあるんですよ。名前はロウネル・サンダース君って言うんですよ。」

「おい！それカー●ルおじさんのパクリじゃねーか！しかもケン●ツキーだから！ハンバーガーじゃないから！せめてドナ●ドにしとけよ！」

「なかなかツツコミが上手ですね。魔術師じゃ無くてツツコミ師に職業変更したらどうですか？」

「どんな職業だよ！戦えねえよ！」

「それより、もうコチラへ来る準備は整いましたか？」

「ああ、だから電話したんだ」

「じゃあ今から転送しますね。行きますよー。」

魔術師がそう言うと、俺の足元に魔方阵が出来上がり、光を放つ。そして俺は光の中へと吸い込まれた。

「早く起きてくださいー」俺が目を覚ますとそこには魔術師がいた。

「さてと。じゃあ急なんですけど、あなたを未開の地へと転送しますね。」

「未開の地？」

「そうです。この世界ではまだ私達のような人族の住んでいないような場所があります。

そこにはブルースライムのような低級魔物からオルトロスのような上級魔物まで、

たくさん種類の魔物がうようよいます。そこで魔物を倒してきてください。

全部で3つの場所にわかれているのですが、場所によって魔物の強さが変わります。

最初は推奨ギルドレベル1〜2で、次は3〜4、最後の場所は5です。

魔力は魔物を倒してあげるのが手っ取り早いので効率よく上がりますよ。

あ、死んじゃったらそれでおしまいですけどね。」

「なんですか？師匠の回復魔術で治せるんじゃない・・・」

「古くから、死者を生き返らせる『黒魔術』の記載された魔術書は封印されてきました。

だから私にも死者を復活させることはできないのです。

まあ、瀕死状態の時なら転生くらいはできますけどね。では話を続けます。

せっかく魔物を倒したとしても、報酬金が貰えないなら嬉しくないですよね？」

「もちろんですよ！俺は金稼ぎ以外には目的なんて無いんですから！」

「そ・こ・で！あなたの倒した魔物は私がギルドに転送します。

そして手に入った報酬をあなたに渡そうと思います。これで文句な

「いすよね？」

「ありがとうございます！・・・ああ、でもお願いがあるんですけど」

「何ですか？まさかロウネル・サンダース君人形をくださいとか？」

「ちげーよ！・・・できれば俺が修行していることは誰にも言わないでくれませんか？」

「なぜですか？」

「実はハーブに街を離れることを言わずにきたんです。

きつと俺がどこか遠くで魔物と戦ってるなんていったら一緒に来ると言うと思います。

あと、心配はかけたくないんです・・・だから、誰にも言わないでください！」

「・・・わかりました。かわいい教え子の頼みですもんね。

なんとかしましょう。なら彼女さんのためにも早く修行を終わらせないといけませんね」

「まだ付き合ってますんよ！・・・でも修行が終わって街に戻ったら告白しようと思います。」

「フッフ、それは楽しみです。じゃあ早く転送しちゃいましょうか。」

魔術師は魔方陣を書き始めた。今回は今まで以上に複雑な形の魔方陣だ。

俺は魔方阵の中へと入った。

「それでは、頑張ってください」

魔方阵が光を放ち、俺は光の中へと消えていった。

・・・これから俺の修行が始まるのだ――――

――目線・魔術師ロウ――

彼には心底驚かされましたよ。まさか、ハーブさんに内緒で来るとは思いませんでした。

しかし、彼の覚悟はよく伝わりました。

転生前から随分と変わりましたね。もう彼はダメ人間なんかじゃない。いい。

彼は金稼ぎのためだけにこの修行を受けたのではないのでしょうか。きっとハーブさんを守るために力が欲しかったのですね。

まあ、愛の力はどこまで通用するのでしょうか楽しみです。

私の予想では、修行を終えるまで10年はかかると思います。

・・・私ですら20年かかったのですからね。

◆◆◆◆◆

残高.. 3万6000メール

収入.. 0メール

支出.. 3万 メール

第14話 「俺、未開の地へ行く」 (後書き)

あの魔術師でさえ20年かかったから

ダメ人間はかなりの時間がかかることでしょう。

まあのんびりと書いていくので宜しくお願いします W

第15話 討伐クエスト 『牙狼獣討伐』 (前書き)

今回は新しい魔物を登場させました。

第15話 討伐クエスト 『牙狼獣討伐』

——目線…広幸——

「……ここが、未開の地か？」

俺が目覚ましたところは大きな草原であった。

かなり見晴らしがよく、魔物に見つかったら逃げるのは困難であろう。

その時、電話が鳴った。

「もしもしー。つきましたか？」

「はい、かなり見晴らしのいい草原につきましたよ。」

「そこは、未開の地の一つである『グラル草原』ですよ。

あ、言い忘れていましたけど、フレアさんにはあなたが修行中のことを言っちゃいました！」

「なんでですか!？」

「フレアさんから、クエストをだしてもらえるようにするためです。これでああなたが未開の地の魔物を討伐すると、ギルドレベルも上がるというわけですよ。」

「なるほど。まあ嬉しいですけど……」

「大丈夫です。フレアさんには口止めしときましたから。

もし言ったら、あの人の脳みそを破壊する魔法でも使っちゃいますんで」

「そこまでしなくていいです!!」

あの魔術師はそんな極悪魔法まで使えるのか・・・

「じゃあ早速ですが、クエストがでていますよ。

今回討伐してもらいたいのは『牙狼獣』です。」

〈図鑑データ〉

牙狼獣 別名…ガルロス 産物…瑠璃色の牙

ガルロスは瑠璃色の鋭利な牙を持つ狼の魔物。

スピードはそれなりに速く、獲物を仕留めるために発達した牙で攻撃してくる。

「ガルロスはイグリュスよりも弱いですから、あなたなら倒せるでしょう。」

今回の報酬は、

基本報酬…8000メイル

産物報酬…1個×4000メイル

物品報酬…牙狼獣チケット×3

ですよ。」

「まあとつとつそのガルロスを討伐すればいいんだろ? いつてくるよ」

「頑張ってくださいね」

俺は電話をきった後、ガルロス搜索を始めた。

「でも一体どこにいるんだよ・・・」

周りを見てもブルースライムやゴブリンくらいしかない。

「とりあえずこいつらでも討伐しておくか」

俺は腰にかけている剣を構えた。そして、目の前にいたスライムを斬る。

「グギギ!・・・」どうやら一撃で倒せたようだ。

やっぱり俺には剣士のほうが向いているような気がする。

そう思いながら俺は剣を腰にかけた。

「次は魔術でも使ってみるか。

炎の精霊よ、私の体にその力を示せ!イナズマアロー!」

右手に雷の矢が形成された。俺は矢をブルースライムめがけて投げる。

矢はスライムに当たると同時に放電した。

「ギルギガ!!!」

一撃で倒せはしなかったが、かなりのダメージを与えることができた。

これも、この前のイグリュスの戦闘で魔力が上がったからだろう。

「よし、炎の精霊よ、私の体にその力を示せ!ファイアボール!」

俺の右腕に炎の球が出来る。

その球を瀕死のブルースライムに投げつける。

「グギギ!・・・」炎はスライムの体を焼き滅ぼした。

もう俺の炎はチャーハンを炊けるくらいまでに成長しており、スライムはプルプルした灰になった。・・・気持ち悪い。

「まあこんなところだよな。じゃあガルロスを探すか。」

俺は周りの搜索を続ける。すると俺の足元の地面が盛り上がった。

「何だ!？」俺が気付いたときには遅かった。

そう、ガルロスが地面に潜んでいて、地面から牙攻撃を仕掛けてきたのだ。

「ぐはああ!!」俺は地面からでてきた鋭利な牙に足をやられた。しかし、俺は素早く腰の剣を抜いて、牙の出てきた地面に突き刺した。

「ガルウウア!!」地面から悲鳴が聞こえた。

そして、地面から大きくて鋭利な瑠璃色の牙を持つ、『牙狼獣』が現れたのだ。

「ガルル!」奴は俺に突進してきた。今までの魔物よりも速い。俺の目の前でガルロスは一瞬沈み込み、牙をアップするよう突き上げてきた。

「うおっと!」

俺はギリギリで突きあがってきた牙を避けた。そのまま剣で奴を斬る。

しかし奴も俺の振りかざした剣が当たる前にバックステップして避けた。

「こいつは中々手強そうだ・・・」しかし、俺には先程思いついた新しい作戦があった。

「炎の精霊よ、我の剣にその身を宿せ! フレイムソード!」

俺の手からでてきた炎は、剣の周りを覆った。

そう、魔法を武器に使ったのだ。

元々が炎属性の俺の剣に更に炎を追加することにより、強力な武器に変わった。

「ガルル・・・」ガルロスは2本の牙をこちらに向けて威嚇している。

「うおおおお！」俺は剣を大きく振った。

もちろん、この剣のリーチでは届くはずも無い。

しかし、俺が狙っていたのは剣で奴を斬ることではなかった。

振ると同時に、剣から炎の球がガルロスの方へと放たれた。

この剣を覆っている炎と、この剣から出る炎が飛び出したのだ。

「ガルル！」不意をつかれたガルロスは避けることもできず、炎の球に直撃した。

そして、ガルロスは吹き飛んだ。しかし、俺は追い討ちをかける。

「もう一発！」俺はもう片方の剣を振った。

剣から炎の球が放たれ、吹き飛ばされたガルロスに直撃した。

「キャン！」犬のような悲鳴を上げて、ガルロスは地面に倒れた。

「やったのか・・・」俺は産物を回収するために近づいた。

「ガルルガ！」するといきなりガルロスが立ち上がり、俺に牙を刺してきた。

「あがぁ!!」俺の腹に牙が刺さる。傷口から血が飛び散る。でもここで負けるわけにはいかない。

俺は最後の力を振り絞り、奴の首元に剣を突き刺した。

「ガ・・ル・・」首から大量の血が飛び散り、ガルロスが倒れた。

「終わった・・」俺はそっと突き刺さった牙を抜いて、魔術師に電話した。

「・・・もしもし、倒し終わりましたよ・・」

「あーお疲れ様です。じゃあ魔物はフレアに渡しておきますね。」

「はい・・・お願いします・・」

それと同時に、俺の横に倒れていたガルロスが魔方陣に吸い込まれ、消えていった。

「今回の報酬の、

基本報酬…8000メイル

産物報酬…瑠璃色の牙×2 8000メイル

物品報酬…牙狼獣チケット×3

はあなたの家のポストに送っておきますね。

あ、あとかなり傷ついてるっぽいですね。じゃあせっかくですし回復魔法を教えましょうか」

「本当ですか!？」

[illegible]

第15話 討伐クエスト 『牙狼獣討伐』 (後書き)

だんだん書いてるうちにチート化してきたし・・・w
ちよつと抑え目でいきましようかねw

第16話 「俺、回復魔法を習得する」 (前書き)

今回は新しい魔術を覚える話です。

第16話 「俺、回復魔法を習得する」

——目線；広幸——

「本当に回復魔法をおしえてくれるんですか!？」

「ええ、この先必要不可欠でしょう。では、そちらに魔術書を送るのでそれを見て習得してください。」

電話がきれると同時に、魔方陣が現れ、そこから一冊の魔術書が現れた。

「これは・・・『ヒールリング』？」

魔術書には、『ヒールリング』と書かれている。

俺は魔術書を読み始めた。たくさんの方が書かれている。

1. ヒールリングの効果

魔力をあまり必要としない初級回復魔術。

回復量は他の魔法に比べて少ないが、ある程度の傷は治すことができる。

傷口を塞いだり、体の疲労の軽減させるなどの応急処置に使われやすい。

2. ヒールリングの発動方法

習得には標準の魔術者でも3日はかかる。

まずはじめに、魔力が血液中を流れていることを想像する。こうすることで、実際に魔力が血液中を回りはじめる。

次に、その魔力が手に溜まっていくことを想像する。

こうすることで血液が流れながら、手に集まっていく。

最後に、傷口に魔力を溜めた手をかざす。

すると、手から魔力によって形成された輪が出来上がる。

その輪が傷口の周りに近づくと、自然治癒能力が高まって回復し始めるのだ。

「なるほど・・・こうか？」俺は血液中に魔力が流れることを想像し始めた。

心臓から魔力が血液と共に流れていくのを感じる。

だんだん体が熱くなっていく。それと同時に傷口の痛みが多少だが和らいだ気がした。

そのまま俺はその魔力が右手に溜まっていくことを想像する。

ドクドク、という血液が流れる感覚を感じながら、右手へと意識を高めた。

だんだんと体の熱さが無くなってきた。

その代わりに右手がどんどん熱くなっていくのを感じた。

しかし、それと同時に傷口の痛みを激しく感じた。

「ぐっ！」俺はあまりの痛みに耐え切れず、意識を傷口へと集中させてしまった。

その瞬間に手の熱くなる感覚は消えてしまった。

「魔術失敗か・・・」俺は本当にこんな集中力を使う魔術ができるのか、と思ってしまった。

しかし、俺には集中力だけには自信がある。

「あんなブラック会社でさんざん重労働させられてきたんだ！
こんくらいあの極悪な仕事に比べたら簡単だ！」

気を取り直して俺は『ヒールリング』の練習を始めた。

（30分後）

「・・・だめだ・・・もう少しなのに・・・」

俺はなんとか痛みをこらえて、右手に輪を作り出すことはできた。しかし、その後に傷口に輪を近づけるときにあと少しのところで輪が壊れてしまうのだ。

「やっぱりなにかが足りないのか・・・」

俺は再び魔術書を開いた。魔術書は300ページ近くも長々と文章が書いてある。

しかし、魔術の習得に関係なさそうなことが書いていたりするのだが、

俺は一度全ての文章を読み直していた。

すると、ある言葉に引っかかった。

『美しき女王の、緑の腕輪を創りして、その輪かざさん時、傷を癒さん。』

輪壊れし時、魔法石で輪を創らん。されば傷癒す輪できん。

また魔術とは、月が創り、太陽が壊す。』

とりあえず、ヒールリングで輪を作ったら傷口にかざすと傷が治る。もし壊れたときは、魔法石で輪を作れば傷を癒すことができる、ということとはわかった。

しかし、魔法石に意識を高め、魔力を溜めようとしているんだが、全く輪ができない。

更にわからないことは、『美しき女王』のことだ。

この魔術を創りだした人だとは思うのだが、それに関しての内容が魔術書に書いていないのだ。

きつと最後の『月が創り、太陽が壊す』にも何か関係があるのであろう。

「でもおかしいな。魔術は太陽が出ていても使えるんだけど・・・」
俺は頭を悩ませていた。こうしている間にも傷口の出血は止まらない。

その時、もう一つの不可解な点に気付いた。

そう、最後の1ページだけが真っ白なのだ。

ざっと目を通しただけでは気にならなかったのだが、今見るとなんだが不自然だ。

前のページの文章が途中で終わっているのだ。しかし、その続きは書いていない。

その時、魔術師から電話があった。

「どうですか？魔術は覚えられましたか？」

「いえ、いいところまでいくんですけど、輪が壊れちゃうんですよ・・・」

「やはり、そこで手間取っているところでしたか。」

「すいません、ちょっと質問があるんですけど・・・」

「なんですか？まさか、ロウネル・サンダ……」

「ちげーよ！どんだけ引きずってんだよ！……いや、ちょっとおかしいんですよ」

「なにがですか？」

「ちょっと不自然なんですよね。あの『魔術書』……」

「ほう……どこがですか？」

「最後のページだけ、何故か空白なんですよ。普通なら気にならないんですけど……」

「前の文章が途中で切れているんですよ。そこで質問なんですけど、何か条件を満たさないと封印が解けないようになってる魔術とかってありますか？」

「ああ、古の封印魔法とやらを聞いたことがありますよ。

昔はそうやって魔術の内容を守ってきたらしいです。

例えば、水をかけたら文章が浮かび上がるとか……

でも、必ず魔術書にヒントが隠されているんですよー。まあ頑張ってください」

「わかりました。ありがとうございます」

俺は電話をきった後、あの文章を思い出した。

『美しき女王の、緑の腕輪を創りして、その輪かざさん時、傷を癒さん。』

輪壊れし時、魔法石で輪を創らん。されば傷癒す輪できん。

また魔術とは、月が創り、太陽が壊す。』

この文章にヒントが・・・ん？

「そうか！！この封印魔術を解く方法は、太陽に当てることだ！！」
俺は気付いた。この封印魔術は太陽の光によって解かれることを。

そして俺は真っ白な最後のページを開き、太陽の光を当てた。
すると、だんだん文章が浮かび上がってきた。

そこに書かれていたのは、女王のことと、魔術の真理であった。

アリドネの女王。この魔術を創り出した人物。

彼女は世界初の回復魔法を創り出した。

この魔術は、簡単に輪をつくることはできない。
作り出すと必ず壊れてしまうのだ。しかし、肝心なのはこの後である。

その時に輪を創り出した手の人差し指で輪を描くのだ。
すると、再び輪が出来上がる。この輪こそが回復に使われるのである。

この魔術書を読んでいるなら、一度は見たはずだ。

『輪壊れし時、魔法石で輪を創らん。されば傷癒す輪できん。』

アリドネの女王は、魔力が非常に少なかったと言われている。

しかし、強力な魔物を国中の者達総動員で倒させ、
その魔物の持っていた魔法石を装備したことにより、強力な魔力を
手にしたのだ。

その魔法石は指輪になっており、人差し指につけていたらしい。
女王はもの凄くその指輪を気に入っていたので、自分の開発した魔
術を発動する際に

人差し指を使わないとできないようにしたのである。
これが、『魔法石で輪を創らん。』の意味である。

「なるほど。ならこうすれば・・・」

俺はもう一度右手に意識を集中させ、輪をつくった。
そして、それを傷口に近づけると壊れてしまった。

その時、右手の人差し指で輪を描いてみた。

すると、緑色の輪ができ始めた。それを傷口に当ててみる。

だんだん傷口の痛みが無くなっていき、2分もすれば傷が完璧に治った。

「よっしゃあああああああ！」

俺は新たに、『ヒールリング』を覚えたのだった。

———目線…魔術師ロウ———

やはり彼の頭の良さには驚かされますね。

あの謎めいた文章を解読するとは・・・正直驚きました。

「この先あの魔術は大変役に立ちますよ・・・広幸君」
だって次の魔物はイグリュスよりも強いんですからね。



残高… 2万2000メール

収入… 0メール

支出… 0メール

合計.. 2万2000メール

第16話 「俺、回復魔法を習得する」 (後書き)

いや、なんか魔術書の暗号が気持ち悪いほど適当になりすぎちゃった・・・

感想・評価・指摘お待ちしております！

第17話 討伐クエスト『乱鎌鼠討伐』(その1)(前書き)

また討伐のお話です。

今回は罠を使ってみます。

第17話 討伐クエスト『乱鎌鼠討伐』〈その1〉

——目線・広幸——

未開の地での修行2日目。

俺はガルロスを倒して手にした奴の肉で朝食をすまし、次の大陸を目指して草原を歩いていた。

あの魔術師が言うには、草原の奥にそびえ立つ山の向こう側に次の大陸があるらしい。

その時、電話が鳴った。

「もしもしー。だいぶ慣れてきましたか？」

「そこそこですかね。」

「じゃあいきなりなんですけどクエスト依頼が来ていますよー。今回は乱鎌鼠の討伐です。」

〈凶鑑データ〉

乱鎌鼠 別名…クロウラット 産物…乱鎌鼠の鎌

ハリネズミが大きくなって針が切れ味のよい鎌に変わった魔物。

体から無数に生える鎌は、攻撃に優れている。

また鎌は頑丈で、防御力を高め。簡単には奴の体に傷をつけられない。

足からも鎌が生えており、スピードがある上に急カーブなどにも優れている。

「なるほど。これはかなりの強敵だ・・・」

「今のあなたなら大丈夫ですよ。とりあえず今回の報酬は

基本報酬…2万メイル

産物報酬…乱鎌鼠の鎌1個につき8000メイル

物品報酬…乱鎌鼠チケツト×3

です。」

「わかった・・・受けますね。」

その代わり今から言うものを準備してもらってもいいですか？」

「はい、買えるものは雑貨屋で買ってきますよ。」

「じゃあ、酸化促進剤と導線10mと長めの釘をお願いしてもいいですか？」

「はい。じゃあとで準備が完了したら転送しますんで。」

「頼みますね。では」

俺は電話をきって、罫を張るのに適正な場所を探し始めた。

罫を張るには周りに水がある場所ではなくてはならない。

俺は湖が近くにある場所を見つけた。これなら罫を仕掛けられるであらう。

「水の精霊よ、私の体にその力を示せ！ウォータードリル！」

俺は湖の近くの地面を削り始めた。やはり魔力も上がって、かなり削りやすい。

「こんなもんかな？」俺は大きな穴をあけることができた。そして、掘り出した土に湖の水を大量にかける。

土が泥へと変わった。これで準備は完了だ。その土を先程穴を掘った地面へと戻す。

そして見た目が周りとは変わらぬように上から普通の土をかけてカモフラージュする。

「完成だ・・・我ながら上出来じゃないかあ」

俺はあまりにも罨が周りの地面と全く変わらないので自画自賛した。

その時電話がかかってきた。

「もしもしー。準備しましたよー。」

導線10m(400メートル)

酸化促進剤(1000メートル×3)

40cmほどのかなり長い釘(600メートル)

合計・・・4000メートル

この4000メートルは今回の報酬から引かせてもらいますからね」

「ええ・・・まあしょうがないですね。」

「では転送しますー」

電話がきれ、俺の横に魔方陣が出来上がる。そして、魔方陣から俺の頼んだ品物が現れた。

「最後の仕上げをするか・・・」

俺はかなり長めの釘と導線を取り出し、釘に結びつけた。

「それより、こんな長い釘何に使うんだろうか・・・」

俺はこんなに長い釘が雑貨屋に売っていたことに驚いた。

まあ今はそんなことどうでもいい。とっととクロウラットを探さな

くては・・・

俺は釘と導線10mを繋げたものと、酸化促進剤を持ってクロウラットを探しに行った。

しばらく草原を歩いていると、大きな穴のあいている場所を見つけた。

きっとここが奴の巣なのであろう、と俺は考えた。

「とりあえず確認だ。炎の精霊よ、私の体にその力を示せ！ファイアーボール！」

俺は巣の中へと炎の球を投げ込む。

「ビーギャガギャー！！」

案の定、クロウラットの巣であった。奴は奇声を上げ、巣からでてきた。

「よう、クソ鼠ちゃん！俺が相手してやるぜ！H A H A H A H A H A H A！」

・・・どうやら最近俺は発狂しやすくなってしまったようだ。

「ギャググー！！」奴は俺に突進してきた。俺は腰にある剣に手をかざしておく。

奴が俺にぶつかる瞬間に居合い斬りを決めてやるのだ。

奴と俺との距離がだいぶ近くなった。そろそろいいであろうか。

「うおおおおお！！」俺は腰の剣を抜く。しかし、俺の計算は甘かった。

奴は俺の剣の一撃を受ける瞬間に、足の鎌を使って急ブレーキを

かけて

そのままジャンプしたのだ。だから俺が剣を振ったときには奴は俺の頭上にいた。

「ビーギャガギャー!!」 奴は全身の鎌を俺に向け、落ちてきた。

「ぐっ・・・!!」 俺は奴の体をなんとか2本の剣で受け止めた。

「ビービー!!」 奴は攻撃を受け止められたことに激怒しているようだ。

「さてと、もう罠を使っちゃおうか」

俺は罠のほうへと走り出した。だが、奴も全速力で追ってくる。

「ビーギャー!」 奴は鎌が生えている腕を振ってきた。

俺の肩にその鎌が直撃する。その傷口から血がでている。

「やばい! なんとか逃げ切れないと・・・!」

この広い草原で隠れることは不可能だ・・・

俺は周りを見渡した。・・・そしてあるいい作戦を思いついた。

第17話 討伐クエスト『乱鎌鼠討伐』(その1)(後書き)

いい作戦とは・・・
まだ考えてない！
W
W

第18話 討伐クエスト『乱鎌鼠討伐』くその2く(前書き)

罨を発動するお話です。

第18話 討伐クエスト『乱鎌鼠討伐』〈その2〉

——目線・広幸——

俺は一度回復をしないとダメな程の傷を受けてしまった。

しかし、草原には隠れられるところが無く、回復したくてもできない。

「なんとか逃げないと・・・！」

俺はその時、隠れられる場所を見つけた。

「そこだあああああ！」

俺はクロウラットの巣へと走り出した。

そう、この草原で隠れられるとしたら、あいつの巣穴くらいなのだ。

「ビーギャギャ！！」クロウラットもそれに気付いて追ってきている。

「水の精霊よ、私の体にその力を示せ！ウォータードリル！」

俺はクロウラットの巣に入ると同時に、巣の入り口の土をドリルで削った。

すると、入り口が完全にふさがって、クロウラットは入ってこれなくなった。

「さてと・・・ヒールリング！」

俺は人差し指で輪を描き、できた輪を傷口に近づけた。

3分ほどして、傷口は完全にふさがった。これで大丈夫だろう。

「さてと、どうやってここから脱出するか・・・」

俺はとりあえずファイアーボールを発動し、明かりの代わりにした。

巢穴はけっこうな広さで、奥に進んでいくと奴の寝床と思われる場所を見つけた。

大量の葉っぱが置いてあり、寝心地はかなりよさそうだ。

しかし、今俺には奴の寝床でぐっすりと・・・なんて暇は無い。

「どうやら抜け道は無いらしいな・・・やっぱり入り口をもう一度ぶっ壊すしかないのか」

しかし、まだクロウラットが入り口で待ち伏せしている可能性もある。

ならば、今俺がいる寝床の天井を壊して脱出しようか・・・

しかし、ミスをしたら天井が一気に崩れ、その中に埋もれてご臨終がオチだ。

「やっぱり一か八かだ！入り口の壁を壊そう！」俺は再び入り口へと向かった。

入り口につくなり、手始めに上のほうの岩をよけ始めた。

下からやっていくと、一気に崩れてしまい大きな音を立てる恐れがある。

「ふうー。それにしても結構重いな」

俺はダメ人間だ。身体能力も残念なので、中1の女子並みの筋力しかない。

そのため、その光が差し込んできたときにはもう2時間が経過してた。

それだけあって、クロウラットはもう待ち伏せを諦め、どこかに行ってしまったようだ。

俺はクロウラットを探索し始めた。

「おお、見つけたぞ！」俺はクロウラットを見つけた。
幸いにも、罠のある場所とかなり近かったのでありがたかった。

「氷の精霊よ、私の体にその力を示せ！アイススピア！」

俺の手には今までのようなつらら程度のものではなく、槍くらいの長さの氷の棘ができた。

・・・んまあ、太さはつまようじくらいなんだけどね・・・。

「喰らえ！」俺は思いっきり氷の棘を投げた。

細い氷の棘は、クロウラットの鎌と鎌との間を通り、皮膚に突き刺さる。

「ビー！！」貫通とまではいかなかったが、かなり深くまで棘が刺さったので痛みには絶叫している。

そして奴はこちらを向くと同時に全身の鎌を逆立てて威嚇してくる。

「悔しかったらコッチまで来い！」俺は挑発して罠の方へと誘い込んだ。

怒りに狂っているクロウラットは、目の色を変えて猛スピードで追いかけてきた。

なんか以上に速いんだけど・・・まあ、無事に罠にたどり着いたから問題ないよな。

俺は急いであの完成度が異常に高くなった泥の地面のところへと行く。

クロウラットは俺を追ってきている。そして、奴は泥の地面に足を

踏み入れた。

「ビー？」奴は地面の感触が急に変わったことに驚いている。奴はもがき始めた。しかし、もがけばもがくほど奴は地面へと沈んでいく。

「こいつをくれてやる！」俺は酸化促進剤を取り出した。酸化促進剤とは、その名前の通り『酸化を促進させる特殊な物質』だ。ちなみに粉タイプだった。それを俺は奴の鎌めがけて大量にかけていく。

「ビーギャア！！」奴は体に大量の酸化促進剤を浴びながら沈んでいく。

H A H A H A ! 奴の象徴とも言える鎌がどんどん錆びていくじゃない K A ★

俺は無様な姿へと変わっていくクロウラットを見てかなり楽しんでいた。

「そろそろだ！」俺は腰にかけている剣を取り出し、まだ泥に沈んでいない部分を斬りつけた。

奴の鎌がなかなか邪魔だが、やはり錆びているので何回か斬れば鎌はポッキリと折れた。

「ギャガビー！！」鎌をきられてかなり痛いらしく、悲鳴を上げている。

しかし、金稼ぎが目的な俺には同情なんてものは無い。

「早く死にたまえー！！」俺はどんどん鎌を切り落としていく。そして、だんだん奴の皮膚が見えてきた。

そこで俺はもう一つのアイテムである『釘に導線をつないだもの』を取り出した。

「刺され！」俺はクロウラットの露出した皮膚へと長めの釘を突き刺す。

「ビー！！！」　　またもや大きな悲鳴を上げている。

そして、俺は奴の背中から降りた。そしてある程度の距離をとって導線を持つ。

「雷の精霊よ、私の体にその力を示せ！イナズマアロー！」

俺は導線に電気を流した。電気は導線を伝わり、釘へと伝わり、クロウラットの体へと流れる。

「ビィィィィィィィィ！」　　奴はからだに直接電気を流されて相当苦しんでいる。

しかし奴もとうとう覚悟を決め、最後の力を振り絞って泥から脱出した。

「ビィィィ・・・」　　奴は腕から鎌を出した。どうやらこれが最終兵器らしい。

「ほう、お前を二つの剣で戦うというのか・・・なら」
俺は腰にかけている剣を二本抜いて、奴の方へと向ける。

「ビィィィィ・・・」　　奴は赤い眼でこちらを睨みつけている。
俺も奴の様子をうかがっている。かなり緊迫した空気が俺達の周りに張り詰めていた。

――これから、俺達の最期の戦いが始まるのだ。――

第18話 討伐クエスト『乱鎌鼠討伐』くその2く（後書き）

次は双剣と双剣の戦いです。

次に幕間的な物を入れたいのですが、意見・要望あつたら教えてく
ださい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5527z/>

転生した異世界で金を荒稼ぎ

2012年1月1日21時30分発行